ルイジアナ州南部のケージャン

——その環境と経済生活、社会・文化——

島　田　正　彦

はじめに…… 3
1.　ルイジアナの開拓…… 5
2.　ルイジアナの自然……13
3.　アナディア人からケージャンへ……19
　　――環境への適応――
4.　ケージャンの社会生活と文化……28
5.　アカディアナ――結びに代えて……42

はじめに

合衆国ルイジアナ州の南部にはケージャンの名で知られるフランス系の、個性豊かな文化を持つエスニック集団が居住[1)]している[文献38, 文献45-11～12頁…以下同じ]。ケージャンはもとアカディアンが訛ったもの[8-1, 38-164]という。アカディア人は植民地戦争の結果の新宗主国イギリスへの忠誠を拒んだため、18世紀半ばに入植100年のアカディア（今日のノヴァスコシア）を追放されたフランス系農民であり、彼らの多くは苦難の遍歴の後に当時未開地であったルイジアナの一角、ミシシッピー川下流のデルタに定着して、ケージャンとなったものである。今も彼らをルイジアナのアカディア人と呼び、また、彼らの住む地域をアカディアナということがあるのはこのような歴史的背景による。

ミシシッピーデルタの孤立的な環境がその文化的特質を維持させた一面があるが、ケージャンとその文化は単にアカディア人の末裔であるのではない。彼らは新しい環境に適応するとともに、彼らに先立ってほぼ同じ地域に入っていたより少数のドイツ人、スペイン人を同化し、プランテーションの労働力としてすでに輸入されていた[2)]黒人からもいくつかの文化要素を吸収して、常に変化してきた。そこにはクレオール文化との混同[3)]の問題もある。1803年の合衆国のルイジアナ購入以後、彼らの周囲には多数のアメリカ人が流入し、その影響を受けて彼らの生活は大きな変容を迫られた。それが彼らのアイデンティティを明確にした一面もあったが、19世紀はケージャンのアメリカ化の時代[28]といわれる所以である。経済生活ではアメリカ人のそれに近づいたにも拘らず、その特質を失わなかった彼らの文化のしたたかさ、柔軟さは驚くべきものがあるといえよう。

今世紀に入り、ルイジアナの石油資源の開発が進むにつれて、彼らの経済生活はさらに変化し、アメリカ人一般のものと変わらなくなっている。しかし、

もともとそれはデルタの湿地環境に適応した特異なものであったといえる。かつてケージャンは常に独立自営の小農民であったが、河川・湖沼の漁撈・狩猟が彼らの自給的な生活を支える生業の不可欠な一部であり、農業の傍ら水路に臨む自然堤防の住居から小舟を下ろし、季節の推移にしたがって魚や水棲の動物を追い求めた。近隣との交流、時たまの都市への往来ももっぱら水路によった。後にテキサス州境に近い南西部の乾燥したプレーリーへ進んだケージャンの一部は牧畜を主な生業としたが、これも彼らの環境への適応力を示すものである。

筆者はかつてアカディアの自然環境とアカディア人の生活について述べたことがあり、その際追放後のアカディア人の遍歴とルイジアナ入植[4)]にも触れた[37]。本稿ではアカディア人に先立った白人の入植、前稿では紙幅の関係で触れることのできなかった西インド諸島を経由してルイジアナへ入ったアカディア人を補足して、ミシシッピー川デルタの白人入植の過程をまず明らかにする。

ついでデルタの低湿地の環境について述べる。巨視的にみれば等しく低平とはいえ、活デルタの沖積地は現流路を挟む比較的狭い範囲に限られており、今では低い台地化した隆起三角州が広く、沖積地には本・支流の流路に沿って発達する自然堤防とその間の堤間盆地（後背湿地）が交錯し、隆起三角洲には旧流路やもとの自然堤防が残されていて、複雑な地形が展開する。また、同じ沖積地でもデルタ上部は森林、下部はアシなどの草原と植性を異にしている。

合衆国南部は奴隷の労働力に頼るプランテーションで知られるが、アカディア人はもともと独立自営の小農民であり、ルイジアナの異なった環境に入ってもそれは変わらなかった。もっとも、彼らの経済生活も外部からの影響を免れることはできず、早くごく一部に綿花栽培の大農場主になるものも出たし、19世紀末に発展した商品栽培の米の大農場を経営するものもあった。しかし、ケージャンの本質はあくまでも独立自営の小農民であり、家族単位の自給を目的

とした。彼らがルイジアナに定着する過程、その後の本来の経済生活の姿をできる限り明らかにするのが本稿の課題の一つである。入植地の自然環境の僅かな違いにより、それが如何に異なったかも自ずから明らかとなろう。そして、異なった環境への適応の結果、アカディア人はケージャンへ変質していった。ここではルイジアナに定着するまでをアカディア人、それ以後はケージャンと使い分けすることとする。

社会生活・文化と環境との間には直接の関係を見出すことは難しい。しかし、それはケージャンの特質をもっとも生き生きと示すものである。経済生活や社会環境の変化の中で、今も変わらぬという土地への執着、家族への愛情、親戚との強い紐帯、訛ったフランス語の会話、カソリックの信仰などがどのように維持されてきたか、特異な風習や料理・音楽などがどのようにして生まれてきたかがもう一つの課題である。

なお、当初のルイジアナは周知の通りミシシッピー川からロッキー山地に至る広大な地域を指し、ルイジアナ州の成立は1812年であるが、ここでは主たる対象地域がミシシッピーデルタであるので、特に断らない限り、以下単にルイジアナとして同州、特に南部のミシシッピーデルタを指すものとする。

1．ルイジアナの開拓

1682年、フランス人探検家ラ・サール（La Salle, R. C. de）が五大湖からミシシッピー川を下り、初めてその河口に達したのが白人のルイジアナ入植の先駆けとなった。彼が流域一帯の土地をルイ14世にちなんでルイジアナと呼んだのは周知のことであろう。1699年に後のバトン　ルージュやや下流のミシシッピー本流右岸にイバァヴィーユ（Iberville）、ビアンヴィーユ（Bienville）の入植地が開かれている［2-xv］。1718年には交易の基地としてニューオリンズが、

翌年バトン　ルージュの砦が築かれて開拓が本格化したが、これと前後してニューオリンズ上・下流の本流沿い、支流レッド川沿いの今のアヴォイエルズ郡などにも本国から直接フランス人が入った。[5)] これがフランス系クレオールの基である。フランス人の流入はその後も続いたが、1740年以後は植民地戦争の激化でその数は多くなかったと考えられる。[6)] 1721年にはニューオリンズから40～50 km 上流のミシシッピー本流右岸にドイツ人が入植、そこは今もジャーマン　コーストの名を残している[7)][28-11～13, 5-53]。1762年、七年戦争にかかわってルイジアナはスペイン領となり、翌年のパリ条約でミシシッピー川左岸はイギリス領となった。この領有権の交替に伴って、植民地の監督官はじめ少数のスペイン人が首都のニューオリンズなどに入った。彼らの入植は[8)]今はほとんど痕跡を止めていないが、ニューオリンズの下流約20 km のテル　オウ　バフス（Terre-aux-Boeufs）はスペイン色の濃く残る唯一の例外である。

アカディア人のルイジアナ流入は1755年の追放直後から始まり、同年中にオハイオ川・ミシシッピー川を経由して到着した一群があった。翌年以降もこれが続き、1760年からはカナダからの脱出者が加わるが、[9)] その区別は困難である。植民地当局は彼らに必需品を与え、ジャーマン　コースト上流のミシシッピー本流右岸に入植させた [28-8]。その頃、追放されたアカディア人の多くはニューイングランド初め大西洋岸のイギリス植民地に集められ、[10)] 戦争の終結を待って改めて各地のフランス領へ送り出された。1764年にアラバマ州モービルを経由してニューオリンズに到着した20人のアカディア人は、この再追放された者がルイジアナへ入った最初の公式記録である [2-12]。翌65年には大西洋岸の諸港からニューオリンズへアカディア人を直送する船が増え、サン　ドミング（現ハイチ）からも２月に初めてアカディア人が移ってきた。ルイジアナはすでにスペイン領であったが、まだ実質的に植民地を管理していたフランス役人の援助を受け、彼らは先の入植者たちの周囲に土地を与えられた。この最初にアカ

ディア人たちが入植した土地は後にアカディアン　コーストと呼ばれ、今にその名を知られている[2-11～12, 41-29]。その後、数年にわたってこの２ルートからアカディア人のルイジアナ流入が続き、その数は全部で3000人に達した。管理を引き継いだスペイン当局は、この不屈で勤勉な農民の受け入れが植民地の強化につながることを知り、以前に変わらぬ保護を与えた。やがてアカディアン　コーストに溢れた新来の入植者、特に1785年にスペイン政府の援助[11)]でフランス本国から来た1600～2000人……アカディア人流入の最後の大波……はバイユー　ラフォルシュ沿いに南進し、また、アチャファラヤ川の湿地を越えて西のバイユー　テシュの上流・中流域へも進出、一部はさらに西のヴァーミリオ

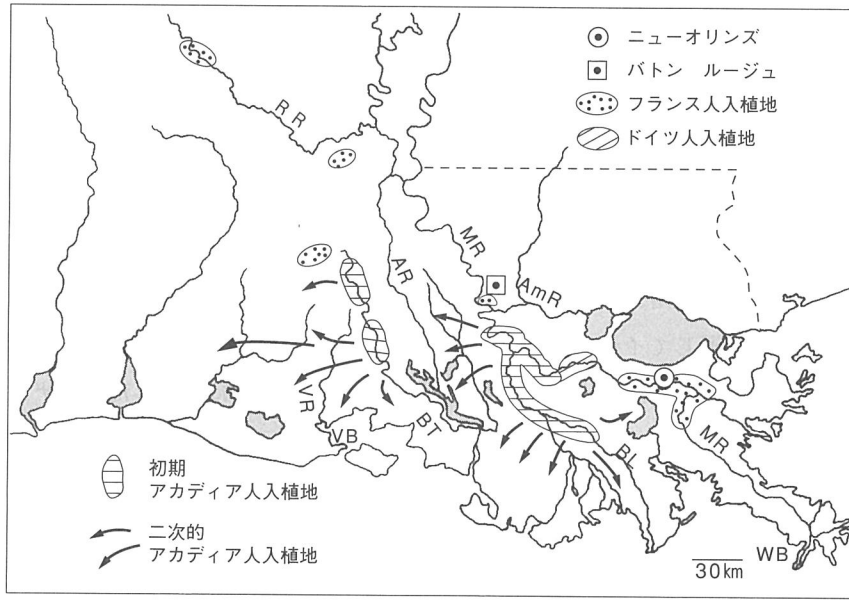


図１　アカディア人の入植地［文献(1)(2)による］

MR：ミシシッピー川	BL：バイユー　ラフォルシュ	AR：アチャファラヤ川
BT：バイユー　テシュ	VR：ヴァーミリオン川	VB：ヴァーミリオン湾
RR：レッド川	AmR：アミテ川	WB：ウェスト　ベイ

ン川流域に入った[2-12～14]。こうして初期のアカディア人入植地が形成された（図１）。

これに先立ち多数のアカディア人が一時的に移住したフランス領アンティル諸島に注意しておく。七年戦争が終わった時、イギリス側に拘束されていたアカディア人の多くはフランスへの帰国を希望したが、本国は全く冷淡であり、彼らの定着先として三つの可能性があった。それはアンティル諸島とルイジアナ、それにオランダ領ガイアナである。既述のようにルイジアナへは彼らの一部が移住していたが、そこがスペイン領となった今は困難があり、イギリスは住民の増加によってルイジアナが強大となることを内心望んではいなかった。ガイアナの場合は1756年に300家族のアカディア人を乗せたイギリス船がアンティル諸島のオランダ領の小島サント　ユースタシュ（Sainte Eustache）に漂着したのが一つの契機であった。同船はアカディアの主都ポール　ロワイヤル（イギリス名アナポリス　ロイヤル）からニューヨークへ放逐者を運ぶ途中、逆風に阻まれて大きくコースを外れたものである。オランダ政府は不屈・勤勉で知られたアカディア人を自らの植民地に入れようとして、ガイアナへの渡航費と入植に要する費用二年間分の公的援助を申し出て熱心に勧誘し、ロンドン駐在の外交官を通じてイギリス政府にも働きかけた。しかし、南アメリカの一角には何の予備知識も持たず、肥沃で健康的というそこへ先に入植したアルザス人の失敗を知って、アカディア人はこれに全く関心を示さなかった。一方、アンティル諸島は硬木の輸入先として早くから彼らの間に知られており、船乗りとして同諸島との間を往来した者もいた。かくして、焦点はアンティル諸島に絞られ、1764年と翌年の二年間だけで2000人以上のアカディア人が同諸島へ向かった［12-26～29］。

彼らはマルティニク、グアドループ、サンタ　ルシアなどの島々にも入ったが、その詳細は全く不明であり、様子がかなり分かるのは現地監督と植民地総

督間の書簡などが残るサン　ドミング西岸の２入植地のみである。ポルトープランスの北西約160 km のモール　サン　ニコラ（Mole Saint Nicolas…以下モールと略記）では、有事にはフランス艦隊を収容できる良湾を見下ろす丘に砦を築くのと、当時無住であったその付近の開拓が目的であった。ポルトープランスの北東約48 km の丘陵地ミルバレ（Mirebalais）は気候も良く、一部にはすでコーヒ園も開かれて、将来の発展が期待されていた。ここには病院があったのも入植地に選ばれた理由の一つであった。両地とも開拓は奴隷に頼らず、白人自営の小農園を開設する計画であった［12-29］。モールには1764年２月に400人のアカディア人が上陸し、２隻の補給艇から物資を陸揚げして、直ちにテントと小屋の開拓キャンプが作られた。ついで森林や薮が切り払われ、倉庫・病院・司令所などの建設にとりかかった［12-32～33］。ミルバレへは同年８月に２隻の船がニューイングランドからアカディア人を運び、その数は少なくとも180人といわれるが、モールに及ばなかった。上陸後、彼らはまず町の家々に収容され、家族ごとに僅かながら菜園用の土地も与えられた［12-85～86］。ところが、モールでは1766年７月にアカディア人への政府援助が打ち切られており［12-79］、すでに彼らのほとんどがここを立ち去ったらしい。ミルバレでも教区記録簿からみて1774～75年にアカディア人は急減し、76年にはさらに僅かしか確認されない［12-87～88］。資料を欠くが、滞島期間がごく限られたのは他の島々でも同じであったろう。これに見合うのが1765年夏以降ニューオリンズへ次々と上陸した同諸島からのアカディア人であった。

この入植失敗の理由をルイジアナとの関連において考えてみる価値はあろう。モールの砦の建設は資材不足で進まず、追放以来の長期の苦難の上に、給与食は新鮮な野菜・蛋白質に欠けたので、暑熱と強い日射の下に彼らは戸外の労働に耐え得なかった。下痢をともなう病気が広がって、５月にはほとんどが動けず、監督官も倒れた。６月10日に到着したカナダから急派遣された２人の医師

は全員が瀕死という惨状を伝え、７月に新任された監督官は556人のうち104人が死んだと報告している。これ以後給与食は改善され、無償であった労働にも対価が支払われたが、食料・強制労働に対する不満は絶えなかった。そのうえ与えられるはずの土地が事前の測量の不備から大幅に削減され、当局との軋轢はさらに高まった。そこへ秋以降、後続のアカディア人が到着し、判明しているだけでもその数は年内に366人に達した。さらに年末にはドイツ人[12)]が押しかけ、翌年１月までに726人を数えた。もともと広くない土地へこのような多数が流入しては収拾がつかず、当局も当初の計画を放棄せざるを得なかった。もっとも、アカディア人のなかには到着直後に現地監督官と衝突して即座に[13)]引き上げた者も少なくない［12-31～35，61～62］。

政府援助打ち切り後のアカディア人の動静については情報がほとんどない。ところが、1773年に組織された民兵のうち各70人からなる砲兵２隊と、25人の騎兵１隊は全員がアカディア人であったから、入植計画が放棄された後、移動の自由を得てからもモールに残ったものはかなりの数であったことが分かる［12-71］。教会の記録簿によると、1775～89年の間にアカディア人は117人が死に、225人（うち64人は両親ともアカディア人）が生まれている。また、同じ年間に記録されている彼らの職業をみると、驚いたことに農場主はもちろん、農業労働者も一人もいない。最も多いのは大工・石工などの職人であり、もっぱら政府の仕事に雇われている。次いで多いのは航海士•船乗りであり、カポ　フランセ、またはポルトープランスとの間の沿岸交易に従事していた［12-80～81］。

ミルバレでも長年の悪い栄養状態の結果、入植１か月に病気が多発し、乳幼児にかなりの死者が出た。しかし町には病院があり、自家菜園から新鮮な野菜を入手できた点はより恵まれていた。やがて彼らは家族ごとに与えられた土地へ入植した。当初は１家族に800ペース[14)]平方の土地が与えられる計画であった

が、これが周辺住民の不満を呼んで中止され、実際に分与された土地の広さは不明ながらこれを下回ったであろう。給与物資の運搬に求められた馬の提供を拒むなど、既住者たちの態度は冷たかった[12-86～87]。彼らのその後については資料を欠くが、恐らく開拓は長続きしなかったであろう。1770年代の結婚記録では、ここに住むアカディアの男はコーヒや藍のプランテーションの被傭者であり、相手はたいていアカディア人以外で、彼らだけの社会は消滅していたことを示す。農場主と記録されたのは、入植後10年近く経た1773年にともにアカディア人の夫婦１例のみである。モールより恵まれたここでも、自営の小農場主創設という意図の挫折は明らかである。彼らがヤムイモ・キャッサバ・バナナなど亜熱帯作物の栽培知識に欠けていたのが失敗の一因であろう。菜園は辛うじて自家用を満たすのみであり、期待された地方駐屯軍の需要に応じられたことは一度もなかった。これが農園の経営ともなると長年の経験と資本が必要である［12-90］が、彼らに資本を提供しようとする者があったとは思えない。

ルイジアナは1765年以降名実ともにスペインの管理下にあったが、政府は植民地総督を通じてかなり手厚い援助をアカディア人入植者に与えた。彼らは食料として各人に一定量のトウモロコシのほか、家族ごとに雌鳥２羽、雄鳥１羽、豚１頭を与えられた。これは蛋白源が塩蔵豚肉のみであったアンティル諸島に比べてはるかに良かった。土地は家族ごとにその人数と必要に応じて川沿いに４～８アルパン[15]が分与された。必要な各種農具などももちろんである［2-14］。注目されるのは土地の分与に当って独身男性も家族持ち同様に扱われたことである。その代わりに彼らは可能な限り直ぐに結婚することを求められた。その結果、多くの子供を抱えて働くことのできぬ中年の寡婦が若い男と結婚した例が多い。これは追放以来多かった欠損家庭を救済する社会政策の一面があり、独身男性の労働力の有効利用策でもあった。また、男達は植民地政府や砦の仕事に雇われ、その技術に応じてスペイン人と同じ賃金を与えられた[41-108]。文

字通り無一物の彼らには現金が必要であり、自立のために早急に牛・馬などの家畜を購入しなければならなかった。ミシシッピー川東岸のイギリス人進出に脅威を感じたスペイン初代総督は、反英感情の強かったアカディア人を河岸の砦近くに分散入植させて、防衛の役割を担わせようとした。彼らは追放以来再会できた家族・親戚と一緒に住みたいとこれに反対したが、総督は自らの計画を強行した。[16] 一方、砦の隊長は16～55歳の男子を民兵に組織して、武器・弾薬や余分の食料を与え、また、輪番にしばしば狩猟隊を出して、その獲物を彼らに分配した。[17] これは最初の農作物の収穫を迎えるまで、彼らの大きな支えとなった。砦はまた周囲の入植者に医療サーヴィスを行い、砦に付属する教会のミサも彼らに開放された［2-14～15］。

アカディア人の家族はしばしば身寄りのない縁者を抱えて多人数[18]であり、その総力をあげての開墾の結果、彼らの多くは一年以内に自給可能になり始め、1770年までには農産物の余剰を持つようになった。それは植民地政府が買い上げる約束になっていたが、彼らは様々な口実を設けて隠し、対岸のイギリス人に高値で売った。強い反英感情も余分の利益の誘惑の前には薄らいだのである［41-108］。長い苦難のために、ルイジアナでも初期には病人や死者を多く出したが、こうして生活が安定してくるにつれて彼らは本来の多産性を取り戻し、人口は間もなく力強い増加に向かった。18世紀末には開拓地に溢れた人口は西のプレーリーへ向かって流れ出す［23-345］。初期のアカディア人入植地はミシシッピーデルタであったが、この二次的な入植地は乾燥した旧デルタの低い台地であり、そこでは農業に代わって自然の草原に牛・馬を放牧する生活が中心となった。その北のより標高の高い、より乾燥したプレーリーは19世紀に入って合衆国中西部の農民によって開拓され、同様にデルタのアカディア人入植地の北も次第に数を増した東からのアメリカ人、新しくヨーロッパから入植してきたスペイン人によって開拓された［41-111］。

2．ルイジアナの自然

ルイジアナはミシシッピーの広大なデルタである。しかし、現在も沖積作用の進む活デルタはその一部、レッド川の合流点から下流の本流とバイユー　テシュ間に限られる[19-12～13, 38-106, 2-15]。そこでは本流とバイユー　ラフォルシュ、バイユー　テシュに沿って幅の広い自然堤防が発達するが、その外側は水浸しに近い低湿地であり、イトスギの卓越する原始林に覆われる。遅くまで湖沼の残ったアチャファラヤ川沿いは沖積作用が遅れ、自然堤防の発達が悪くて低湿性が強い。また、海岸近くにはアシなどの生える湿地が広い。これらの沖積低地は植性の違いによって前者はスウオンプ、後者はマーシュと呼んで区別されている [26-21]。

本流の右岸では、海岸近くのマーシュと北方のマツ林の丘陵との間に、隆起して低い台地となった旧デルタが広く、沖積低地との境を示す崖地はバイユーテシュの西を北北西から南東に走っている。この台地の北半はマツ林に覆われるが、南半はプレーリーと呼ばれる草原である。台地の表土のすぐ下には固い粘土層が広く、それが根の侵入を拒んで樹木の生育を許さない。マルマントウ、ヴァーミリオンなどここを流れる川は今は台地に浅い谷を刻むにすぎぬが、それはかつてのミシシッピー本・支流であり、もとの谷底は粘土層の下の透水層に達している。そのため河谷に沿って回廊状の樹林――カシなど常緑樹が混ざるが、落葉広葉樹が主――があり、それによってプレーリーは幾つかに分かれている。また、今の谷がその一部を占めるにすぎぬ、古い堆積物で埋まった幅広い旧河道沿いに、もとの自然堤防が残り、全体に平坦なプレーリーの中の微高地となる[6-152～153, 33-574～575, 2-22～23]。本流の左岸にもバイユー　マンチャ～ボンチャトレン湖の回りのスオンプの北に台地化した旧デルタがあるが、それはあまり広くはない（図２）。

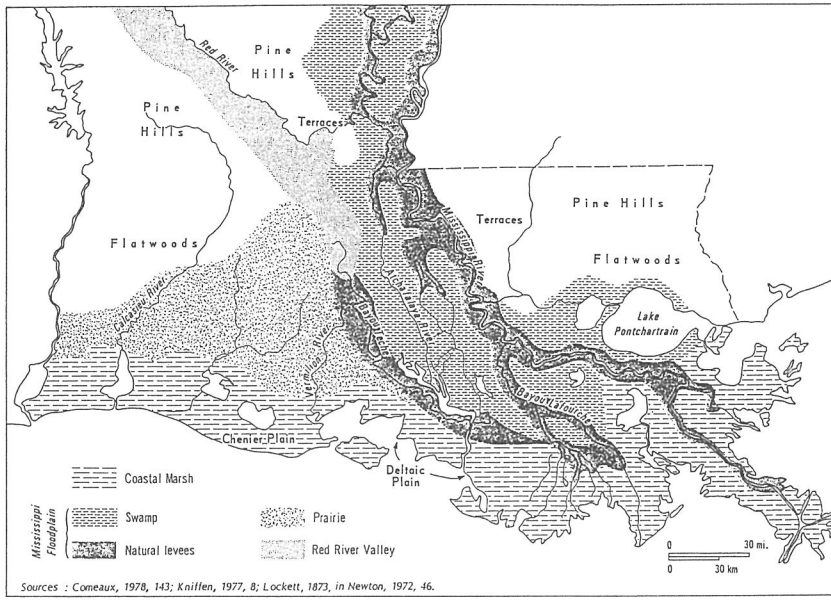


図２　ルイジアナの地形［文献(38)による］

メキシコ湾北部は地向斜の沈降帯に当り［35-450，26-22］、海岸線は沈降平野の特徴を示し単調であって、流入河川の河口もエスチュアリーとなるものが多い。ミシシッピーデルタは著しい例外であり、それは排出土砂の多さによるが、特徴のある鳥趾状デルタは堆積と沈降のせめぎあいの結果を示す。すなわち、河道に沿っては堆積が著しく、デルタの先端は海中へ伸びるが、一歩河道を離れると堆積は及ばず、そこは海に沈んでいる。ミシシッピー川の年間平均排出物量は５億トンのオーダーといわれるが、デルタ拡大の速度は同程度の排出物量のある他の川に比べてむしろ緩慢であり、それは基本的にはデルタの急激な沈降によるものである［19-47～48］。

鳥趾状デルタ先端のウエスト　ベイ付近ではかつて自然堤防だけが河道沿いに海へ伸びていたが、1839年に同湾の北東部で右岸が切れ、堆積が急に進行し

た。1875年には湾内はほぼ堆積物で埋められたが、急成長した新デルタも1922年には臨海部の後背湿地に海水が浸入して新しい入江を形成、陸地面積が減少して、デルタは衰退の傾向を示した。同様の現象がデルタ先端ではくり返されており、最も新しくは1891年にノースパス右岸が切れ、ガーデン　アイランドベイに堆積とその後の沈水の進行がみられた［19-66～67，26-24］。

最も新しい鳥趾状デルタの形成は1200～600年前に始まるが、ミシシッピーの河道変遷とそれにともなう副デルタの形成・放棄の歴史は4000～5000年前まで追跡できる。沖積世に入って、7000年前までにまずバトン　ルージュ付近まで埋積され、その後ヴァーミリオン湾からボーン湖にかけての湾岸に７副デルタが次々と形成された[26-24]。河道変遷によって放棄された副デルタはいずれも沈水が著しい。例えば2800年前に発達したサン　ベルナール副デルタは、先端の一部をシャンデルア諸島に残して、かつての堆積地の大部分はシャンデルア・ブルトン両入江の海底にある。海岸線は小さな凹凸に富むが、それは網状流路沿いの自然堤防が海面上に残り、後背湿地が沈水した結果である［35-451～452］。

沈降の影響はデルタ全体に強い低湿性を与え、堆積作用が最近の2000年間続いたにもかかわらず、厚い堆積物の自重による沈下に打ち消されて、デルタ面は北部を除いてメキシコ湾の高潮位とほぼ同じである[36-78]。このように土地が極めて低平であるから河流は曲流はなはだしく、氾濫がくり返されて、その両側に自然堤防が発達する[19]。一方、堆積の及ばなくなった堤間盆地には海面下の所もあり、曲りくねった流れるともみえぬ水路がスオンプを連ねる。これがバイユーであり、放棄された本流・支流の旧流路である。ただ、アチャファラヤ川は今もミシッピーの水をかなり排水して、支流の機能を果たしている［19-68］。なお、海までの距離も同川は約230 km で、現本流の約480 km よりも遙かに短く、人工策[20]が構じられなければ近い将来本流が同川へ移るといわれている

[26-28]。

曲流によって河流が側方に移動する場合、屈曲部の外側の自然堤防は強く浸食されて内側が急傾斜となり、さらに浸食崖の崩落などが起こると自然堤防は切れ、クレヴァス（洪水による破堤部）から流路が変わる[19-68]。河床に堆積が進み、それがデルタ面より高くなった川では流路の変更は決定的である。しかし、まだ堆積が進まず、河床が高くない川では分流を生じる。この河道分岐点では河床に堆積が進みやすく、結果として流量がどちらか一方に偏る。流量の少なくなった川は河床にますます堆積が進み、それに妨げられて高水時以外は流れなくなり、ついには閉塞されてしまう。このような過程はデルタの網状流路のいたる所に起った。ただ、放棄された河道の多くは後に堆積物に覆われ、あるいは河流に削られて痕跡を止めていないが、河道の大変遷はすでに触れた通り明らかである。レッド川＝アチャファラヤ川はかつて本流であり、バイユー　テシュもその上流からヴァーミリオン川を連ねる谷が旧デルタの台地を南北に貫き、旧本流の一つとみられる[35-445～446]。また、バトン　ルージュ下流の左岸曲流部にあるバイユー　マンチャックは、1814年に人工のダムで堰き止められるまで、高水時にミシシピー川の水が自然堤防のクレヴァスから流れ出ていた[21-462～466]。[21)]

サベン、カルカシウ、グランド、モラパ、ポンチャトレンの湖を結ぶ線はマーシュの内陸側の限界を示し、ほぼ中央にあるヴァーミリオン湾でそれは二分される。より形成の古い西部のマーシュは幅25～30 km と狭く、海岸線は沖積作用を上回る波食を反映して平滑となる。地盤の沈降は河口の湾入に現れ、また、砂州に排水を阻まれた川の下流部の広く浅い谷は潟湖に変じている。より若い東部のマーシュは幅が広く、ヴァーミリオン湾の東でそれは最大となり、そこは活デルタと最近放棄されたデルタの混合である。海岸線は極端に不規則であるが、そこには３類型が認められ、その１は鳥趾状デルタの河道両側の沖

積作用の圧倒的なもの、その2は現河道の東の沈降作用の顕著なもの、その3は現河道の西の両作用の混合するものである［36-74～75］。

西部のマーシュ海岸には、この地方でシュニエと呼ばれる小さな砂の高まりが何条か海岸線と平行に伸びている。最大のグラン　シュニエは幾つかのバイユーに切られているが、長さ100 km を越え、幅350 m 内外、高さは湿地の水面（＝海面）から最大2.7 m である。その基部はマーシュ堆積物からなり、その上を砂が覆い、海岸に近いものは海産の貝殻を多く含む。これは波により打ち上げられた砂の堆積を示し、ミシシッピー河口がずっと西にあった時の前進していた海岸線に当る。形成の古い内陸のシュニエは土壌も肥沃となり、カシの群落に覆われて［35-458～459］、その内陸側にはアシの生える湿地が連なる。ただ、ここでは旧自然堤防は今では海面とほぼ同水準になり、地形的に大きな意味はもたない［36-77～78］。

現河口東のマーシュは古い堆積地の上に薄く新しい堆積物を乗せ、沈降が急に進んだので陸地と海域が判然と分かれ、湿地はあまり広くない。鳥趾状デルタに終わる現河道に近いマーシュは自然堤防が発達し、それに人工が加わり、ニューオリンズ付近では4.5 m の自然堤防に3 m の構築物を乗せている。そのため堆積の及ばない堤間盆地には海面下の土地が拡大する傾向にある。しかし、今日では人工排水が進み、ニューオリンズ市域内では河道から9 km離れた所に海面下5 m の広大な干拓地がある［36-78～79］。現河口の西、ヴァーミリオン湾に至るマーシュは発達の時期を異にする古いデルタが重なって、複雑な姿を見せる。高さ・幅を減じながらも残る旧自然堤防がこの地域を幾つかの堤間盆地に分けるが、湿地の占める面積がはるかに広い。各盆地は支流の小自然堤防でさらに多くの小堤間盆地に分かれ、本流の河道が放棄されて久しいから、支流の多くはバイユーと化して堆積物の供給は少なく、小湖沼も多い。その堆積物には草本の有機物が多く、それが広い範囲にわたって泥炭化している。そこ

にはアシは生育せず、この地方でフロータントと呼ぶ湿地[36-78]となる。それはアシの湿地より植生は豊かであり、淡水域ではガマ、汽水域ではカモジグサが卓越する。しかし、両植性とも効果的に土壌を生まず、それは水面に浮遊する水草の群れとアシの茂る湿地の間にあり、水域と陸地の中間の性格をもつ[36-98]。

ミシシッピー川は洪水が多く、今世紀に入って60年までに11回の大洪水が記録されている。そのうち７回は４月にピークのある融雪洪水であり、その被害はミズーリ、アーカンザスの流域とミシシッピー上・中流域に多く、ルイジアナが大被害を受けたのは1944年の１度だけである。もちろん、上流の洪水は下流にも高水位をもたらしたであろうが、1960年の例では上流域の大洪水も本流の中流域で収束し、セント　ルイスでは洪水位（自然堤防の高さ）を1.1ｍ越えたにすぎなかった。残る４回は夏に中西部を通過した低気圧の大雨が原因であり、なかでも今世紀最悪といわれた1951年の洪水は７月14日にカンザスシティで洪水位を８ｍ越えた。セント　ルイスでは６月29日から１か月洪水位を越える高水位（最高は７月22日、＋3.5Ｍ）が続いたが、これは本流域では洪水波の移動は緩やかであったことを示し[39-92～94]、ルイジアナの被害はそれほどではなかったらしい。下流域で最悪のものはミシシッピー州グリンヴィルの上流で本流の堤防が決壊した1927年の融雪洪水であり、アーカンソー・ルイジアナ両州を含めて氾濫面積は７万 km²、死者313人、被害総額は２億5000万ドルに達した[13-29～30]。これ以後政府は巨額の資金をつぎ込み、2700 km に及ぶ大堤防を築くなど、あらゆる洪水対策に取り組んできた。これが一応の功を奏して、1973年、1993年の記録的大洪水にも本流の下流部は辛うじて破堤を免れることができた[40-62]。

低いデルタ地帯ではハリケーンとそれにともなう高潮は洪水以上に破壊的で恐しい。フロリダ半島に比べれば襲来の頻度は低いが、８～９月はその季節で

あり、一度襲われれば深刻な被害は免れ難い。1957年にデルタ西部を襲ったオードリではカメロン郡で死者554人を出した。1965年9月ミシシッピー川沿いに走り抜けたベッシーは秒速40 km を越える猛烈な風と2.7 m の高潮を沿岸に打ちつけ、河口の西約70 km のグランド　アイルは壊滅的な打撃を受けた［20-356～359］。

デルタの気候はケッペンの温帯湿潤気候に属すが、ニューオリンズは緯度30度に位置して、年平均気温20.0℃と高く、最寒の1月平均気温は10.6℃、最暖の7月平均気温は27.7℃である。年降水量は1583.5 mm、10月の77.7 mm を除いて月に130 mm 内外［34］とほぼ均等であるが、夏は高温多湿となり、しばしば亜熱帯と表現される。冬は温暖で、降霜は稀である。西部のプレーリーでも年降水量が100 mm 強少ないほかは余り変らない［35-576］。なお、重要作物との関係でみると、ミシシッピー河谷のルイジアナ州北部はワタの適作地であるが、デルタの南部は結実季の秋に雨が多いために外れ、より多湿を好むサトウキビが適作である［18-120，42-774～775］。

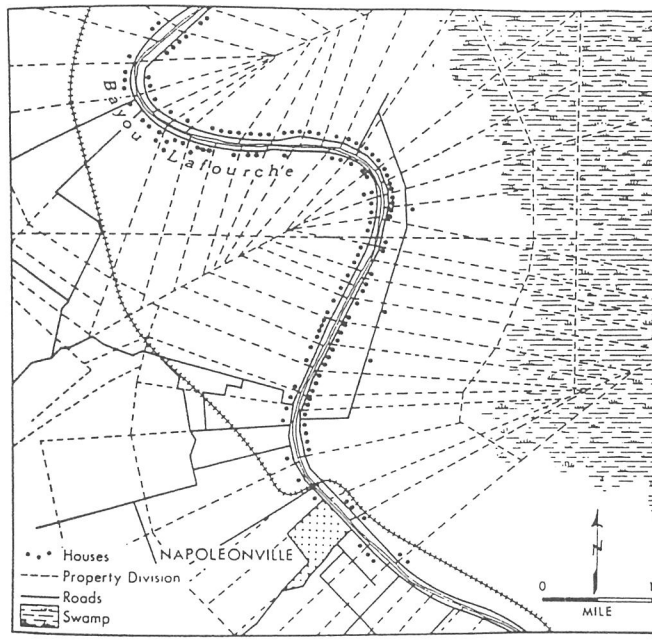
3．アカディア人からケージャンへ――環境への適応――

アカディア人が最初に入ったアカディアン　コーストはデルタ上部、本流右岸の自然堤防であった。そこは低湿な活デルタのなかの唯一高燥な土地であり、洪水にも比較的安全で、最も優れた居住地といえる。この付近の自然堤防は高さ6 m を越え、幅は1.6 km 内外あり、川沿いが最も高く、流れに面しては急傾斜し、背後は緩く傾いて堤間盆地の湿地に移ってゆく［2-18］。彼らは最高所に近隣を結ぶ道を通じ、それに面して住居を建て、背後の緩傾斜地に耕地を開いた。もともと溢流した河水の放棄した運搬物からなる自然堤防では、質量の大きい、重いものから早く沈澱するので、川に近く粗い砂が、遠ざかるにつれ

てより細かい砂が堆積し、湿地近くにはシルトや泥が沈積している。耕地に開かれた緩傾斜地は肥沃な細砂からなり、排水が良いうえに、鍬や鋤による耕作も容易であった［6-145］。

ついで彼らが入植したバイユー　ラフォルシュ、バイユー　テシュ沿いの土地も流れに沿う自然堤防であった。本流に比べれば規模はやや劣ったものの、そこも優れた居住地であった。この場合、入植地が比較的上流部に限られたことは注目される。下流部では自然堤防が低くなり、その価値も低下した。アチャファラヤ川流域が避けられたのも、すでに注意したようにそこは自然堤防の発達が悪く、低湿性が強かったからである。洪水を受けやすい堤間盆地のスオンプも自然の森林のままに捨て置かれ、用材を伐り出す外はもっぱら狩猟地として利用された。このように初期の入植地はデルタのなかの最適の場所を選んでいる。しかし、洪水の危険から全く免れることはできず、彼らは入植当初から自然堤防に土を積んで嵩上げを行っている。それでも下ろしかけた生活の根を洗い流され、一から始め直さねばならなかった例も少なくはない［41-198～199］。なお、デルタと自然堤防は彼らにとって初体験の環境であったが、築堤はファンディ湾の潮間湿地を締め切って耕地としていた［37-142］彼らにはお手のものであった。

アカディア人は家族ごとに得た４～８アルパンの土地を区画するに当たり、短い一辺が川に臨む細長い短冊形の地割を行なった。川の曲流部ではそれは実施困難となるが、彼らは可能な限りこの川に直交する地割を行なおうとした。土地を相続する場合もフランスの慣習に従って均分し、さらに幅の狭い、極端に細長い短冊形に細分している［2-16～17］（図３）。この地割は荘園領主制と結び付いた17世紀のフランス人入植地、セント　ローレンス川下流域に今も残るもの[22]に酷似する［9-154～158，24-270～271，16-70～72］。ただ、アカディアの故地では荘園領主制は名目のみで、この地割も認められず、両者の関係は不明であ



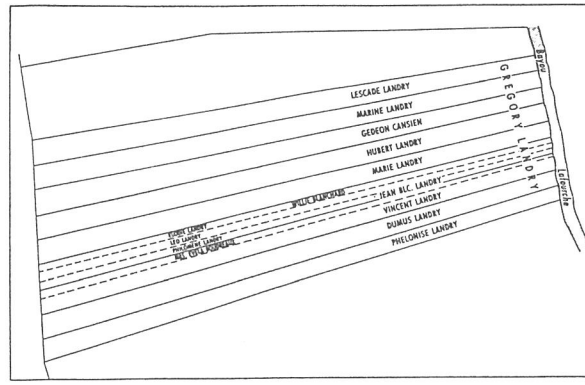


図3　アカディア人の集落［文献(2)による］
（上）地割と家屋配置に注意。
（下）相続による耕地分割の例。

る。セント　ローレンス川下流域は氷河の後退により沖積世に入って一般に隆起し、従って浸食地形がめだつ所で[24-267～268, 42-334～337]、自然堤防の発達する堆積地形の所ではない。住居が川沿いに並ぶのは川が開拓地の生命線＝交通路であったことによるのであろう。[23] ルイジアナの場合、同時に入植した少数のカナダ人の影響はあったにしても、耕地を各家にできるだけ平等に……広さだけではなく、地味の点でも……配分しようと意図した結果ではなかろうか。なお、堤防上の道に沿って住居が配置されたので、入植地の集落はいわゆる路村となり、地割とともに著しい形態上の特徴であった。

各農家は主屋の背後に夏用の炊事小屋、納屋があり、差し掛け屋根のある粘土で固めた半円形のパン焼き竈を別にもつものもあった。やがて鶏小屋・鍛冶場などが付け加わり、一つの納屋を多目的に使用したアカディアとは異った。宅地が広く、高温多湿なことによるのであろう。宅地の一部は園地となり、それに続く耕地は柵や板囲いで幾つかに区分され、作物の特性に従って利用された。例えばトウモロコシやサツマイモは粗い砂地で排水の良い自然堤防の上部に、サトウキビは細かい砂地で排水は劣る下部に、コメは泥の混じる末端近くに植えられた。自給が目的であったから、作物の種類は上に挙げたもののほか、ジャガイモ・各種マメ類・メロン・スイカ・カボチャなどの野菜類、オレンジ・ナシ・スモモ・イチジクなどの果樹、コショウ・ワタ・藍などと非常に多かった[2-16～17, 25]。フランス人が好むコムギはここでは育たず、トウモロコシが主穀であった。その補助として重要であったコメ・サツマイモ、園地で栽培されたオクラ・トウガラシ・トマトなどは彼らがここで初めて出会った作物であったが、その栽培知識は先住インディアンのチティマチャ族、ホウマ族や隣接地のドイツ人から習った［2-45～46, 6-145］ものである。

親類・縁者は隣接地を占め、互いに助け合った。開墾・収穫、家の建築、船の建造などには彼らは無償で労力を交換して共同で作業した。狩猟や漁撈も共

同して行い、獲物が多い時は近所にも分け与えた。また、大型獣を獲た時や家畜を屠殺した場合には肉の適切な保存法がなかったので近隣の者も集まり、ともに解体・料理して、野外の宴会となる［2-45～46，53～59］。デルタでは初め全く駄獣を欠いたが、1735年頃にテキサスから供給されるようになり、アカディア人は入植初期から各戸に１～２頭の牛・馬を湿地の近くに周年放牧した。馬は手作りの乗用二輪馬車を、牡牛は木製の鋤・まぐわや、牧草・作物を積んだ荷車を引いた。牛乳やバターも自給したが、バターは攪乳器よりは甕に入れて攪拌した［2-17，42］。トウモロコシの粉ひきもコメの脱穀と同様に木製の臼と竪杵[24]を使った［33-579～580］。

河川・湖沼、沿海は栄養分に富み、そこに棲む魚・動物は補助的な蛋白源として重要であった。コイ・スズキ・ナマズ・アリゲーター　ガー[25]・フエダイ・カレイ・エビ・ザリガニ・カニ・カキなどが多く、一本釣り・延縄・曳網・掬網・籠などのほか、ナマズやカメの手摑み、食用ガエルのヤス漁といった古い漁法もみられた［2-31，55～57］。肉を食用とするワニ、毛皮を目的とするマスクラット・アライグマの罠猟もしきりに行われた。また、ここは渡り鳥の大越冬地であり、リョコウバト[26]・ヤマシギ・カモなどが飛来し、森林にはリス・ウサギやシカ・クマなど大小の獣が罠猟・銃猟の対象であった［2-58］。

道路未発達の水郷であったから、舟は生活に不可欠であり、どの家も様々の型の舟を何隻か持っていた。彼らは故国やアカディアの舟型を引き継ぐ一方、デルタの環境に適した舟型や造船の技法を学んだ。浅いスオンプでは先住民の丸木舟に模し、棹で押すピロウグ、彼らの創意になる両端が長く尖った平底の、オールで漕ぐバトウが使用され、湾岸の航行にはヨーロッパの伝統を引く大きなスキッフを、沖合へはさらに大きなシュリンプ船[27]を使った。モス[28]・カキ採集など特定の用途に適した舟も作られた。船材にはスオンプのイトスギが使われ、その樹脂が腐食やシロアリによく耐えた［2-30，59～60］。珍しい織物・台所道具・

小間物などを持つて家々を回る行商人、氷売りなども舟を漕いでやって来た。鶏、特に卵が広く支払いに充てられた。農家が舟で遠出するのは年に２～３回、そのうち１回は郡庁所在地へ行き、様々な法的手続きを済ませ、税を納める。遠出が10月の場合は農産物の余剰を近くの市場町へ積んで行き、僅かな利益を得た［2-21，27］。

18世紀末にアカディア人が二次的に入植したプレーリーでは、水と薪・木材の入手容易な川沿いの回廊状の樹林に集落が立地した。樹林は一部を残して、切り払われて宅地・園地となり、排水の良い砂質の旧自然堤防に耕地が開かれた。川に直交する地割りがここでも行われたが、旧自然堤防の幅に制約されてそれはあまり細長くはなく、集落形態も数戸程度の家屋が散在する小村となる［2-19，135］。プレーリーには直径40～50 m、深さ40 cm 程の浅い丸い池[29]が無数にあり、集落に近いものは垣で囲って天水田に利用した［33-575～576］。それでも耕作適地は限られ、自然の草原に牛馬を放養する牧畜が生業のなかで比重を増した[6-154]。すでに早くインディアン、ついでスペイン人がテキサスから牛馬を持ち込んで放牧しており、アカディア人は彼らからここでの放牧の方法を学んだ。ここでも交通手段は可能な限り舟であったが、西に進むほど馬・馬車となり、乗馬を好む風習は今に伝わる。川沿いの樹林はプレーリーの東部に多かったので、入植地は当然東部に多く、表土のすぐ下に固い粘土層が卓越するプレーリーの中部以西は人口も極めて稀であった。そこでも深井戸から良い地下水が得られる所では、薪や柵用にセンダンの木などを植林して、広く開けた草原の中へ住居を進める者もあったが、その例はごく限られた。彼らの農耕は自家菜園の域を出ず、男達は家畜の群を追って広くプレーリーを移動した［6-153，2-25～26］。家畜の飲み水は浅い丸池に頼り、それがない時は人の手で掘った。成育した家畜はレーク　チャールス、テキサス州のオレンジなど近くの河港へ行進し、そこでニューオリンズその他へ向けて船積みされた。

一般にアカディア人がルイジアナの新しい環境に適応してケージャン化したといわれるが、その転化は何を以て測るべきか、極めて難しい。それというのもアカディア人、ケージャンともにその本質が必ずしも明らかとはいえぬからである。しかしながら、自然堤防上の集落立地、自然堤防と堤間盆地の土質に応じた土地利用、亜熱帯作物の採用、広い森林や水域を活用して農業を補完する狩猟・漁撈、浅い水路に適した船型創出などは、いずれもデルタの低湿環境へのみごとな適応例ということができよう。このような生活様式が一応確立した時を以てケージャン化したと考えてよいと思う。ただ、それが何時のことかもにわかには定めがたい。入植後２～３世代［6-142～143］という通説に従えば、18世紀末から19世紀初めということになろう。これは彼ら自身の、いわば内なるケージャン化である。もう一つの外なるケージャン化、すなわち周囲のアメリカ人一般からみて特異な生活・文化の認識、あるいはアメリカ人を鏡にして見た自分達の生活・文化の独自性の自覚、それは1812年以降、彼らの周囲に多数のアメリカ人が流入してからのことである。それまで彼らは未開のデルタにほぼ彼らだけの孤立した社会で暮らしてきた。外部との接触を意識的に避け、それをやむを得ぬ最低限に止めようとする心情は入植以来彼らに通有のものであった。それは追放以来癒されることのなかった心の傷の反映[30]といえよう［8-10］。

1812年以降、東部からのアメリカ人、スペインからの新移民が多数その周囲に入ってきた[31]時、ケージャンはもう一度移住を迫られた。デルタの低地のなかの最適の居住地はすでに占居されていたから、新来者たちは初めデルタの未占居地に入ったが、そこはスオンプの湿地に近い自然堤防の末端や、分流沿いの低い自然堤防であり、洪水の危険は大きく、地味も劣った。記録ではその過程は余り明らかでない[32]が、世紀半ばまでにケージャンは最適の居住地から追われてこの劣悪地へ入れ替わっている。それは本流とバイユー　ラフォルシュ沿い

で特に早かった。19世紀初めと約20年後にこの地方を訪ねた旅行者たちは、小農民が占居して様々な作物を作っていた自然堤防が広大なサトウキビのプランテーション農場に変わったことを伝えている。富裕なアメリカ人に適地が買い取られたのであるが、当時ケージャンの多くは負債に悩み、土地所有者に義務づけられた宅地の前の堤防・道路の保守が重荷であったところへ、高騰した地価に誘惑されたのである。また、大農場主は自営農民は奴隷に良からぬ夢を与えると、その一掃を計ったという。バイユー　テシュ沿いでも1840年代にこれと同じことが起こった[6-146～147]。各バイユーの下流域、アチャファラヤ川のスオンプにケージャンが入ったのはこれ以降のことである。

この時、居住地を追い出されたケージャンの中に海に近いマーシュへ移った者があった。ヴァーミリオン湾までの東部マーシュに入った者は、水面上60～90cm、幅2.5～3mの僅かな微高地に小屋を建て、その周囲にサトウキビ畑や水田を開いた[14-16]。しかし、耕地は狭くて農業による自給は困難であり、やがてその多くは住居を舟に移して、もっぱら狩猟・漁撈に頼るようになる。たいていの者は微高地に小屋を残してはいたが、それは住居よりは一時的に滞在するキャンプであり、時たま立ち寄って泊ったり、親類・縁者の連絡の場所だったりした。舟は季節で異なる猟場、漁場を回るにも、獲物をニューオリンズへ[33]運ぶにも便利であったし、洪水やハリケーンには安全な水路へ避難することができた［6-151～152］。

西部マーシュへの入植はさらに遅れた。最も僻遠地であるうえに、砂の微高地は小さく、孤立していたからである。プレーリーの住民が冬に家畜をここに放牧したのに始まり、1880年代になって彼らのなかに内陸のシュニエの内側に永住する者が出てきた。しかし、集落は極めて疎らであり、規模もごく限られた。耕作適地も狭いため、農業は野菜などの自給が辛うじて可能な程度であり、牛の放牧が主たる生業である。また、ここでは狩猟と河川・水路の罠猟は行わ

れたが、近くに市場を欠くため漁業、特に沿海のそれはほとんど行われていない［6-156～157］。

19世紀の半ば、南北戦争前のケージャンの営農の実態を具体的に示す例がいくつかある。バイユー　テシュ上流のサン　ランドリー郡の典型的な独立自営農民である富裕な農家は、ワタ・トウモロコシ・サツマイモなどありとあらゆるものを植え、16 km 程離れた繰綿所へ数俵（1俵は約50 lb）のワタを売り、家畜を仲買人に売り渡すなどして、僅かな現金収入を得ていた。また、バイユーラフォルシュ流域はすでにサトウキビのプランテーションが発展していたが、付近の286農家のうち、118農家は20エーカー以下の耕地を所有するにすぎない。このうち、37エーカーを耕作する農家は5エーカーにトウモロコシ、30エーカーにサツマイモを植え付け、馬4頭、牝牛1頭、豚16頭を飼っていたが、この地域の主作物であるサトウキビは栽培していない。また、カルカシウ郡の20エーカー程度の耕地を持つ31農家のワタ生産量は合計13俵、1戸平均0.3俵に過ぎず、それはほとんど自家用であったとみて間違いなかろう［44-24～28］。

南北戦争は南部諸州に甚大な打撃を与えたが、ケージャンの生活は余り大きな影響を受けなかった。ミシシッピー本流沿いを除くとルイジアナは戦場とならず[34]、自営の小農にとって奴隷解放[35]は直接には関係がなかった。しかし、「渡り政治家[36]」が最後まで州政府を握ったルイジアナでは再建期の経済・社会の沈滞は長く続いた。1882年にプレーリーを横断する鉄道が通じ、中西部からアメリカ農民のそこへの流入が始まる［33-580, 2-28］。作目をコムギからコメに変え、人工潅漑の採用と手慣れた農業機械の僅かな改変によって、彼らは10年ほどの間にプレーリーを企業的な大米作地[37]に変えた［33-583～585］。それはケージャンには放牧地にしか使用されなかったプレーリーの中部以西が中心で、地力を維持するため水田と牧場の隔年の輪換[38]が広く行われた［33-586, 6-154～155］。

小規模ながら、ここでもケージャンの立ち退きがみられた。彼らは入植地を

アメリカ人に売り渡し、一部はプレーリーの東部に土地を得て移住したが、多くは農業労働者となり、ニューオリンズなど都市へ流出した者もあった［33-582, 6-154］。プレーリー東部のケージャンは、ごく一部にアメリカ人に倣い、水田耕作によって経営規模を拡大する者もあった［33-582］。しかし、多くは主作物をトウモロコシとワタに転じて、毎年作付地を替えながら、所有地のそれぞれ40％をそれに当て、残りの20％は牧草地・園地・家畜の囲い込み場などに使用した［6-153］。主作物の販売量が増えても、自給という彼らの営農の基本は変わりがなかった。また、牧畜は目的こそ違え、水田／牧場、トウモロコシ／ワタのいずれの地域においても依然重要であった。

1901年、プレーリー西部のジェニングスで石油が発見[39]され［2-xvi, 14-62～63］、これ以後ケージャンの経済生活はアメリカ化が加速される。マーシュで新油田の開発が相次ぐと、若者は石油とその関連産業に雇用され、その現金収入は当然自給的な生活を大きく変えることとなった。第二次大戦後のオイルブーム、それに続いた工業化により、今ではケージャンの生活はすべての面で他のアメリカ人と均質化されたとまでいわれる［1-132～135］。しかし、７勤７休、あるいは14勤14休の勤務体制が一般［1-64］的な彼らは、１～２週間の休暇を大家族ごとに集まって漁撈・狩猟……今では水棲動物[40]の罠猟が主……に費やすことが多く、水路沿いの粗末な旧住居に手を加え、これをキャンプと呼んで共同生活の場としている［2-31, 64］。なかにはカキ•エビなどの漁季に長期休暇を取るものもある。このような休暇の過ごし方にケージャンが長く慣れ親しんだ生活の息吹を今もみることができるのである。

4．ケージャンの社会生活と文化

初期のアカディア人はもちろん、ケージャンの社会でも、19世紀の後半にな

るまで確立された慣行とか、正式の制度などはまず存在しなかった。役人も、警官も、彼らの社会にはいず、公立学校や市場は設立されず、教会すらもほとんどなかったのである。いきおい、日常の仕事・社会集団は孤立した地域住民の中に求めざるを得ず [2-21]、一般に以下に挙げるような特殊な集団が存在した。いずれも家族・親戚が中心であり、集団を構成する家々の範囲は時と場合により大小様々であったが、集まる頻度の高い、比較的小さな集団の核となる家はほぼ一定[41]していた。生きるための日常生活は厳しく、そこからどの集団にも共通して、相互扶助の精神がその底にあることが認められる。また、苦しい現実を忘れようとするかのように、生活を享楽しようとする心情も反面において著しい。

ルイジアナ入植以来アカディア人たちは親類・縁者が集まって住み、19世紀に入ってアメリカ人に追われたケージャンの移住でも可能な限りそれを維持しようとした。初期の未開地の中での孤立した生活では家族・親類のほかに頼るものはなく、隣接して土地を入手した彼らは互いに助け合い、協力して開拓に取り組み、クウ　ドゥ　メン<coup de main>と呼ばれる手間替えが広く行われた。19世紀になっても、家・納屋の新築や増改築、あるいはその補修や移動[42]、作物の植え付けや収穫、船の建造などにそれがみられ、時には労力提供者に食事や飲み物が振る舞われたりした[2-39, 124]が、無報酬が原則であった。援助を受けた者は他日同様な機会に労力をお返しすれば良かったのである。このような相互扶助の網の目の永続が、彼らの社会的結束を更新し、強めたのはいうまでもない。今日では各種の社会保障が発達し、また、貨幣経済の浸透も著しいから、手間替えの行なわれる機会は次第に減ってきている。しかし、農村部ではそれは彼らの社会生活の重要な要素として生き続け、援助を求められた者はたいていやりくりして手間替えに加わる。それが社会の中での自分の位置を確保するのに必要と考えられているのである [2-50～51]。

狩猟や漁撈でも親類が協力した。夏～初秋の農閑期がその季節であり、アチャファラヤ湿地の中央やメキシコ湾岸への遠征は2週間にも及ぶことがあった。それは家畜の屠殺数を減らし、また、塩蔵肉も腐りやすい季節に新鮮な肉を得るため、欠かせぬものであった [2-38]。獲物は参加者の間に均分されたが、多量の獲物があった時は近隣の家々にも分け与え、ここにも相互扶助の精神がみられる。今では職業的な狩猟は禁止[43]されているが、レジャーとして楽しむ者は多く、漁撈はレジャー、職業とも盛んなことはすでに触れた。

塩蔵以外に肉の適切な保存法がなかったので、牛・馬の大型家畜や、豚・山羊などでも何頭かを屠殺したときは、親類・縁者を中心に何家族かが集まって、野外で焼き肉の会食をした。ブウシュリ＜boucherie＞と呼ばれたこの会食は、時にはある小地域の全住民が集まる大きなものが開かれたが、たいていは常連の数家族が集まり、そのなかで各家が輪番で家畜を提供するホスト役を勤めて、半ば定期的[44]に開かれていた。皮も、内臓も、血も、貴重な食料であり、解体の傍らでいつもソーセージなどの副産物が作られ、内臓のシチュウも料理[45]に加わった。集まった者は情報を交換し、ゴシップでともに笑い、それが連帯感を一層強めた。ブウシュリは冬が厳しく、飼料が不足するアカディアの故地で、秋に家畜の頭数を調節するために始まった[37-145, 29-226]ものであり、ルイジアナでは肉の腐敗しやすい夏にもっぱら行われた。冷蔵庫やスーパーマーケットの出現で、今ではブウシュリも稀にはなったが、少数ながら楽しむのだけを目的に集まる人達があり、田舎の祭りではそれが呼び物になっている例もある[2-45～46]。

生活を楽しむという傾向はアカディア人以来の強い特色であり、とりわけ彼らのダンス好きは広く知られ、それは今も変わらない。19世紀の後半になってホテルのダンス室で不定期に、参加者の多い大舞踏会が開かれるようになったが、もとは週末になると、あちらこちらの家に近隣の人達が集まり、小さな舞

踏会があった。バル　ドゥ　メゾン<bals de maison>と呼ばれたこの舞踏会にも参加する家族がほぼ決まっており、会場はそのなかの家の回り持ち[46]であった。老若男女、子供たちまで、どの家族も一家挙げて参加し、大人も子供も同じ輪になって踊る。子供は宵のうちに仮の寝所に追いやられるが、大人は夜を徹してフォーク　ダンスを楽しむ。翌朝、疲れ果てて、楽士の演奏……近くの同じ農民で、楽器はアコーディオンとヴァイオリンが多い……が途絶え、踊る者が誰もいなくなると、ホストが数発ピストルを発射し、閉会を告げて舞踏会は終わる。参加者は皆盛装し、礼節を守り、優雅に振る舞わねばならなかった[47]。舞踏会の目的はもちろん楽しむことにあったが、伝統的な音楽と舞踊、料理や言葉の伝承にも相当な役割を果たした［2-46～47］。

この舞踏会はまた、若い男女が生涯の伴侶を捜す場所でもあった。結婚年齢は早く[48]、娘がティーン　エージャーになると、親は美しく着飾らせてこの社交界へ送り出した。もっとも、若い娘は常に両親の監督下にあり、舞踏会では特に叔（伯）父か兄が監視して、近寄る青年は厳しくチェックされた。当事者同士が好意を示し合うと交際が始まり、互いに相手の家の訪問を重ねる。結婚するには事実上両拡大家族全員の同意を得なければならない。事がうまく運べば、青年が娘の両親に結婚を申し入れ、やがて挙式を迎えるが、許嫁となっても二人の交際は玄関前の歩廊（後述）のような半公開の場所で行われた。今はケージャンの若者も他のアメリカ人と同様に自由なデートを楽しんでいる。昔は相手を選ぶ舞踏会の参加者が近隣に限られ、その多くが親戚であったから、従兄弟[49]や又従兄弟の結婚はケージャンの間では多かった。このような結婚は財産の分割相続のとき、結果的に財産が親戚の内に残ることになるので、親の方が望んだ面もある［2-72～73］。

初期のケージャンの結婚式は、近くに教会がなかったので、教会の儀式なしで行われたが、披露宴と舞踏会を伴うのは古くからの伝統であった。式の中で

新郎・新婦は箒の柄に跨がって跳ね回り、それが夫婦の絆を固めるという風習があった［2-51］。19世紀になると結婚式はカソリック教会の規則に基づいて行われるようになり、例えば式の執行に先立って、結婚の公告が教会で日曜日毎に三度行われた［2-73, 103］。同世紀の末には楽隊を伴って、両方の拡大家族が教会に集まる盛大な儀式となり、披露宴には蓄えた自家製のケーキや料理が振る舞われた。また、舞踏会には様々な伝統行事も行われた。なかでも有名なのは結婚行進で、伝統の結婚行進曲に乗って新郎・新婦が舞踏場を歩いて回り、その後に双方の両親・名づけ親・祖父母・兄弟姉妹・伯叔父母たちがペアーを組んで続く。新郎新婦がワルツを一曲踊り、踊り終えた二人が参会者を踊りに誘うと、祝賀の舞踊会が正式に始まる。ほかに変わった風習として、新郎・新婦の未婚の兄・姉が裸足で踊る[50]。また、招待客は花嫁とのダンスやキスと引き換えに、ヴェールに紙幣をピンで刺し止め、舞踏会が終わるまでに花嫁は紙幣の帽子を被ることになる。このような結婚式は今もあまり変わることなく続き、紙幣のピン止めは新郎の上着にまで拡大している［2-51～52］。

農閑期の冬にはバル　ドゥ　メゾンよりも狭い範囲の、ごく近くの親戚や友人が集まって、半ば遊びの夜なべをした。ヴェジェ＜veillee＞と呼ばれたこの集まりは、普通夕食後に互いに家庭を訪問し合うもので、コーヒ・デザートにお喋りがつきものであった。ホスト側・訪問者とも男女・年齢別のグループに分かれ、男達は木製の道具を削ったり、農具を補修したりし、女達は回りで遊ぶ幼児の面倒をみながら、糸を紡いだり、衣服を繕ったりした。お喋りの主役は男達で、話題は政治や農事ではなく、民話であり、暖炉の火影が部屋の壁に揺らめくなか父親たちは民間信仰の施療者が行った不思議な治療法や、魔法使いや鬼火に出会った話を子供たちに聞かせた。おとぎ話や動物の楽しい話の後で子供たちは眠りに就き、ジョークや法螺[51]を交えた大人の話は夜半まで続く。ヴェジェは冬の夜の単調さを救うとともに、彼らの風習を守り伝える役割をも果

たした。民間信仰や迷信はケージャンの口承の伝統の中でも際立ち、毎日の生活にも溶け込んでいた。多くの小農は民間療法を信じ、また、例えば不作や家畜の伝染病は悪霊の仕業とされ、幸運も悪運も前兆がそれを予告し、月の満ち欠けが植え付けや家畜の剪毛の適期を決めた［2-49～50］。

カソリック教会は誕生・結婚・死亡など人生の節目に関わって、ケージャンの家族を支えたばかりでなく、農事・漁期の始めには司祭が畑や船に聖水を振り掛けて祝福するなど深く生活に密着していた。金曜日や四旬節に獣肉の代わりに魚を食べる戒律は、教会が公式には廃止したにも関わらず、ケージャンの間では今も守られ、信仰の堅い一面を示す［2-82］。宗教的な年中行事では四旬節の開始を告げるマルディ　グロ＜Mardi Gras＞[52]が特に盛大に行われ、物乞いの行進[53]という異色の習俗がその中心となる。帽子やマスクで顔を隠し、悪魔や道化の衣装を身に着けた若者が酔っ払い[54]の群となって、馬を駆ったり、踊ったり、歌ったりしながら村々から近くの町へ集まってくる。この行進の途中、彼らは施し物をねだって家々を回り、それを受けると様々なおどけた芸を見せる。施し物で一番喜ばれたのは鶏で、後刻ガンボ（後述）に入れて皆で食べる。興奮が高まると、行進は見物の女・子供を脅したり、追っかけたりし、また、物乞いは強要となり、時には略奪となって破壊を伴うこともあった。今日でもマルディ　グロは盛んに行われるが、行進はグループごとに予め決められた、絶対の権限を持つキャプテンの指示に従う。物乞いに回る家、施し物なども前もって打ち合わせが行われる。地方の中心の市や町では祭りを請け負う業者もあり、雇われた若者が筋書きにしたがって物乞いの行進を演じる［2-84～94］。

生活を楽しむことと並んで、ケージャンは家庭の暖かさ、外からの訪問者に対するもてなしの良さ［2-37］でも知られている。父親はチュートン系のように権威や威厳で家族を統率するのではなく、常に慈愛をもって家族に接する。日常の仕事から社交まで、子供の時から社会集団の中で育った成員は、指示され

なくとも時・場所による各自の役割は心得ており、父親は家族の行動の指示はしても、むしろ目立たぬ全体への目配り、調整の役目に徹する[2-71～72]。母親はより重要な家族の核であり、家庭の暖かさ、もてなしの良さもおおかたは彼女に発源しているが、それは主婦として代々引き継がれてきたものである。親戚の輪に支えられて、アカディア人以来の伝統的な価値観や文化を守り、伝えてきたのもこの母親たちであった[2-69～70]。ルイジアナ入植の初期に、数はそれほど多くなく、相対的にはより貧しかった彼らが、ケージャン化の過程で周辺のドイツ人・スペイン人、一部はアメリカ人すら取り込んで文化的に同化してきたのには、彼らの家庭の暖かさ、もてなしの良さが一面で大きな力であったと思われる。既述のように、彼らは外に対して身構え、殻に閉じ篭る傾向があったが、その殻を破って中に入ってきた者は快く迎え入れ、暖かくもてなした。一方、外来者にはそれが心を捉えて離さぬ魅力であったはずである。

アカディア人の末裔という血統の正しさは、時代を経て次第に問題とならなくなり、それに代わって文化がケージャンの本質として重要となってきた。特異といわれたその文化も時代とともに変化し、20世紀になってそれは著しく、特に第二次大戦後はアメリカ文化一般に埋没して失われたものもある。それには1930年代に石油産業が大量の雇用を創出したこと、若者がアメリカ兵として大戦に参加したこと、1960年代にテレビに代表されるマス　メディアの普及などの影響が大きかったという[2-75, 8-11]。ケージャン文化の変わらぬ特質として、ある者は神（信仰）・家族をあげ［1-139]、ある者はこれに土地を加え［2-15]、またある者は土地に代えて口承の伝統・言語を加える[2-227]。彼らは本来自営の小農民であり、土地への執着は強かったが、機械化による企業的大農業に抗し得ず、前世紀の末以来土地を離れて都市に住む者があったのはすでにみた通りであり、その数は増える一方である。従ってここに土地をあげるのは不適切かもしれないが、神・家族・土地は長く彼らの価値の基準として認められ

てきた[3-213]。家族は都市においても近くに住み、田舎に一部が残るときは婚礼・葬式・祭りなど、機会あるごとに集まってその紐帯を再確認し、集まることを目的にわざわざブウシュリを催したりもする。日曜日のミサへの参加、子弟のカソリック学校への就学など、信仰の力も依然として大きい。テレビが家庭内の会話の機会を奪う傾向は強いが、生活を楽しみ、客を良くもてなす風習は今も変わらぬから、口承の伝統も受け継がれているといってよかろう。

フランス語はアカディア人の入植以来、ケージャンの共通のコミニュケーションの手段として重要な役割を果たしてきた。もっとも、20世紀になるまで教育機関は全くなかったといって良い[55]から、彼らの言語は話し言葉だけであった。1916年に州の義務教育法が成立[4-214]し、ケージャンの子弟も公立学校で教育を受けることになった[56]が、それは英語によるアメリカ人としての教育であり、彼らは学校では課業以外にもフランス語を禁じられた。ほかには何も話せない子供が、学校ではフランス語が使えなかったのである。思わずフランス語を話したばかりに、先生に罰を受けた記憶のある大人は今でも多く、英語が母語の同級生からは、彼らの言葉は教育のない者が使う話し言葉だけの劣ったものだと蔑まれた[32-173～174]。1968年にCODOFIL（後述）が設立されるまでの半世紀ほどは、ケージャンのフランス語は危機的状態にさらされ、それは彼らの文化の根底にも関わるものであった。四世代同居も珍しくない家庭がこの場合救いであったといえる。

母国語から切り離されて3世紀以上、ケージャンのフランス語はそれ自体言語と文化の強い活力の証拠ではあるが、母国の言語とは当然かなり違ったものとなっている。一部の単語の綴り方に古い形を残すこと、現代のフランス語では発音しない複数形の末尾の子音を発音すること、語頭に母音のある男性名詞が17世紀までの母国のように女性であることなどはその好例である。フランス各地……パリから遠く、そして互いにかけ離れた……の方言も使われているが、

それが何故ケージャンの言葉に入ったかはよく判らない[32-175]。ケージャンのフランス語は文法も非常に単純化しており、例えばある種の動詞の現在形は人称の如何にかかわらず同じである［32-177～178]。英語・スペイン語や、インディアンやアフリカ人の言語から借用した語彙の多いのも特徴である。また、ケージャンのフランス語は、他の地域の者が聞いて分からぬほどではないが、ルイジアナを通じて一つではなく、地域によって若干の違いがある［32-176]。なお、ケージャンのフランス語とは別に、＜ルイジアナ　フレンチ＞＜クレオールフレンチ＞と呼ばれる言葉がある。前者は母国の標準フランス語に極めて近いが、構造と語彙にケージャンのフランス語が入り込んでいる。この言語は私立学校でフランス語を学んだ今では高齢の人達が使い、文章も難なく書くことができる。後者は黒人達の使う言語で、発音・文法なども非常に単純になっている。ルイジアナの三つのフランス語のうち、使用者数は後のものほど少なく、また、書き言葉のあるのは＜ルイジアナ　フレンチ＞のみである［32-174～175]。

ケージャンの物質文化については、紙数の関係もあり、19世紀の、すなわちアメリカ化される以前の衣食住を取り上げるに止めたい。まず衣服は19世紀を通じてほとんど変化がなかった。男は膝までのズボンに綿製のシャツと短い上着を着け、パルメト椰子の葉を編んだ帽子を冠っていた。女は羊毛または綿のスカートにストッキングを履き、綿のシャツ・ドレスを着て、頭にネッカチーフ、あるいは顎紐の付いた縁なしの帽子を冠った。少量のキャリコを除いて、衣服の素材はすべて自給であった。畑で摘み取った綿の実からホイットニー[57]以前の幼稚な綿繰機で繊維を取り出し、紡いだ糸を機に掛けて粗い布地を織る。それを天然の染料で染めて、衣服に仕立てる。これらはすべて主婦・娘たちの仕事で、綿摘みは子供も手伝った。靴も自家製で、南北戦争までは木靴であったが、プレリーでは牛や鹿皮のモカシン[58]を履き、男の物は脛当てが付いていた。

末期には女が東部やヨーロッパから輸入された靴を履くようになるが、教会へ着くまで靴を手にして裸足で歩いたという話もある［2-39～42］。

ケージャン料理は今では大変有名になり、大都会では必ずその店がみられるほどである。そこで欠かせぬのは海産ザリガニ＜crawfish＞の一皿であるが、1950年代半ばに流通ルートに乗るまでそれは入手困難であり、ルイジアナでもそれほど賞揚されなかった［2-142, 30-152］。このようにケージャン料理は時代とともに変わり［2-145］、また、ドイツ、黒人、インディアンなどの要素も採り入れた雑種［2-138］であって、この二重の意味でケージャン文化の代表といえる。南北戦争の前にプレーリー東部の農家で夕食を供された旅行者は、食卓には一つは牛乳、一つは糖蜜の入った洗面器ようのボールが置かれ、目玉焼きとサツマイモ、小麦粉のパンとベーコンの皿が出て、家族と一緒にちぎったパンをボウルに浸して食べたこと、翌日の朝食はパンがなく、ベーコンとジャガイモだったことなどを述べている。このような食事は南部の貧しい白人のそれと変わらない［2-43～44］。白いパンと牛乳は祝典や特別の客のためのご馳走であったが、肉は相当ふんだんに食べられ、トウモロコシのパン、煮たジャガイモ、焼いたサツマイモ、新鮮な豆、牛か豚、あるいは野獣の肉が19世紀のケージャンの食事の主流であった。

料理の基本は質の劣った固い肉をとろ火で長時間煮込み、さまざまなソースを作って変化の少ない料理に異なった風味を与えて食欲を増進させるもので、それは明らかにフランスから受け継いだもの[59]である。もっとも明瞭なインディアン要素はトウモロコシのパンである。黒人要素は古くからの代表料理の一つガンボ＜gumbo＞に明らかである。ガンボはもともとオクラ入りのスープを意味する［2-141］が、オクラは黒人がアフリカから持ち込んだものである。もっとも、ガンボにはオクラのほかにも実が多く、野生の鳥獣、家禽などの手に入る肉[60]は何でも一緒に入れ［29-153］、実の種類によって××ガンボと名が異なる。海近

くに住む者はエビ・カニ・カキなど海産食品をよく用いた。一般にガンボは米と一緒に食べられたが、米は青いバナナの葉に包んで蒸すか、油でいためた。これが代表料理の一つジャンバラヤ＜jambalaya＞であり、これにも米と一緒に入れる魚・肉などに多くの種類があって、名を異にしている[30-154]。いうまでもなく食料も僅かな量の小麦粉を除いて、すべて自給であった [2-43]。また、トマトを煮物に加え、調味に好んでトウガラシを用いるのはスペインか西インド諸島の影響であろう。アルコール飲料はビールであったが、それはブドウが育たぬのに加えて、明らかにドイツ人の影響を受けたものである。

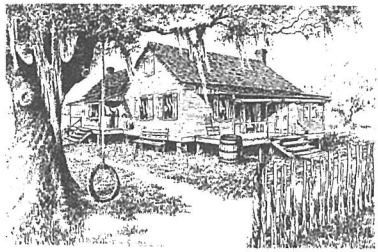
実はフランス系のクレオール料理にもガンボやジャンバラヤがあり、材料も、調理法もほとんど変わらない。ただ、ケージャン料理は過度に脂肪を使わず、また、ハーブ・スパイスなどの香辛料は素材の本来の味を引き出すために使い、香辛料の味が勝ち過ぎると、その料理は失敗であるという [30-154]。

住居に関する古い資料はほとんどないが、それでも僅かな手掛かりからルイジアナ入植以来の発展を4期に分けることができるという。入植時に最初に建てられたのはホウマ族の小屋に倣ったと思われる一時凌ぎのもので、2、3年とは保たなかっただろう。あるフランス系クレオールの記録[61]によれば、大地に数本の柱を立てて長方形の平面を確保し、その短辺の中央に先のものより3分の1長い、先が二股の柱を2本立て、それに横木を渡して屋根の棟とした。そして、長辺の柱の上に渡した横木と棟木の間に垂木を架け渡して、釘で打ち付け、その上をイトスギの樹皮か、パルメラ椰子の葉で覆った [2-117～118]。

その後に建てられた半永久的な住居は柱または垂直に立てた壁板の下部を土に埋め込んだ地床の家で、壁板の隙間には土や石灰、スペイン　モスなどを詰め込んでいた。また、丸太を水平に積み重ねて壁としたものもあった。平面は長方形で、切妻の大きな板屋根を乗せ、屋根裏の空間は息子たちの寝室であった。1階は中央の隔壁で分けられた2部屋……1室は居間・食堂・台所の兼用、

1室は主寝室……の小さな家で、耐用は数年程度のものであったが、実際ははるかに長く住まわれ、19世紀の半ばまでみられた[2-118]。この第2世代の住居はアカディアの故地のものと同じである[17-162, 2-115]が、地床は高温多湿のルイジアナには適したものではない。

18世紀末から第3世代の、永住をめざす本格的な住居が建設された。それが以前のものと大きく異なるのは高床と歩廊である。高さ2フィート内外のイトスギの土台の上に根太が横たえられ、それにほぞ穴をうがって柱が立られてた。長方形の平面や柱と梁、棟木と垂木という木の枠組みは変わらない。また、少なくとも家屋の前面、多くは背面にも床が幅広く張り出され、外側の端を数本の柱だけで支えられた差し掛け屋根がその上を覆った（図4）。このオープンな空間は歩廊と呼ばれ、テーブルや椅子が置かれて一家団欒の場、また、近隣との社交の場ともなった。この高床・歩廊はよく熱湿の環境に適応したものである。中央に2部屋……居間・食堂・台所兼用部屋はより大きくなる……の間取りも変わらなかったが、歩廊の端を壁で仕切って、屋根裏部屋とともに男の子の寝室とし、裏側のものは物入れにも使用した[2-121～123]。



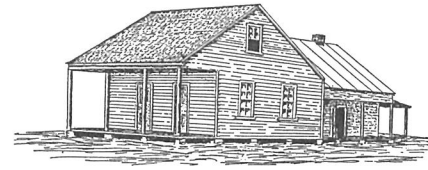


図4　ケージャン第3世代(左)と第4世代(右)の家屋［(左)文献(2)，(右)文献(22)による］
背後の建物は炊事小屋。

アカディアの故地のものと全く異なったこのような住居は、ルイジアナのフランス系クレオールの住居の模倣であった。高床に歩廊をもった住居は18世紀

の始め以来ニューオリンズ市街やその周辺でフランス人の入植者によって建てられ、ルイジアナ到着の当初から、それを彼らは目にしていた。その典型例は家屋の四周を歩廊が取り巻き、その側面及び背面の一部は仕切って部屋としたが、前面の歩廊は完全にオープンな空間として残されていた。また、平面形は方形[62]に近く、それを覆う屋根は方形造りであり、歩廊を含めた床面積はかなり大きいので、中央の主室部分のみが高く突き出た市女笠型であった［2-119～120］。ケージャンの家屋が切妻のままであったのは、床面積が比較的小さかったことと、建築が容易であったこと［2-130］によると思われる。

19世紀に入って第3世代の住居をやや大きくしたものが建てられ始めた。両者の間には本質的な差異はなく、かなりの期間併存したが、19世紀の後半には第3世代のものは建てられなくなるので、これを第4世代と呼んでもよかろう。その違いは家屋前面の歩廊全体をオープン　スペースとし、屋根の棟を高くして、大きく傾いた切妻の屋根が歩廊をも直接覆った（図4）点である。これによって屋根裏部屋は天井が高くなり、スペースもかなり拡大された［2-130］。また、屋根裏に上がる階段[63]が前面の歩廊の一端にある西部型と、背後の歩廊を仕切った部屋の中にある東部型の分化を生じ、アチャファラヤの湿地がほぼその境界線であった。より規模の小さかった西部の家屋は階段によって部屋のスペースが削減されるのを嫌ったからであろうという［2-132］。

1920代からコンクリート板が建築用材として一般に用いられるようになり、それとともに伝統的なケージャンの民家は急速に姿を消し、今では僻地でもそれはめったに見られなくなった[64]。建築様式も画一化が著しく、切妻屋根に前面の歩廊と庇を支える柱列を残すものが僅かに存在するのみとなった［2-136］。

伝統的な民家がまだかなり残っていた1930年代初めに、ルイジアナの民家を形態的に分類し、その分布を調べた研究は、レッド川の谷とバイユー　テシュ、ミシシッピー河谷とバイユー　ラフォルシュを結ぶ線の間に歩廊を持つ民家の

濃密な分布を認めている。ただ、ここでは文化的な背景は省かれているので、ケージャンとクレオールの区別はつかない。しかし、プレーリーでは東部に歩廊を持つ民家、西部に二階建ての民家が分布し、ケージャンと中西部農民の区別を明示している[22-188～190]。また、ミシシッピー本流に近いマーシュの東部には罠猟師型、カキ漁師型の民家（図５）があり、使用者に基づくというその名称や分布域からみてケージャンの民家と考えられる。カキ漁師型は高さ４～５フィートの杭の上のプラットフォームに家屋の本体が建てられ、それは一部屋のショットガン型[65]が多い。罠漁師型は直方体に近い箱のような家屋で、屋根が僅かに後に傾いて片流れとなる。屋根・壁とも板葺きが多いが、パルメラ椰子の葉も使われ、内部は一部屋だけである[22-187]。罠漁師型は今もキャンプの基地にみられる［14-73～74］。

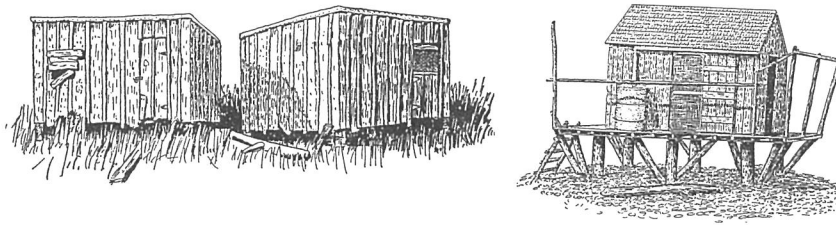


図５　罠猟師型（左）とカキ漁師型（右）の民家［文献(22)による］

かつて広く各地のケージャン農家にみられた畜舎兼用の納屋は、今ではその機能を全く失っているが、バイユー　テシュ流域とプレリーの東部にかなりよく残っている[66]。それは切妻屋根を持つ直方体の建物で、入口は妻側にあり、中央に作業場とその奥の穀物置場、両側に畜舎が配置されている。中央部分の正面は畜舎の部分より２ｍほど奥にあり、三方は板壁と扉となるが、一方は外部に解放されたままで、そこが納屋全体の入口の機能を果たしている。この入口はケージャンの納屋だけにみられる極めて特異なもの［5-48～49］である。穀物

の搬入は納屋背後の中央の壁の上部にある扉[67]から行われ、その手前の空間がトウモロコシの脱穀などが行われる作業場であった。畜舎では冬に家畜が飼育され、その一部には搾乳場もあった。また、屋根裏は干し草など冬の飼料の備蓄場であった。

この納屋の起源はジャーマン　コーストのドイツ人のものであったと推定されている。彼らは入植の初期に四本の支柱の上に小さな穀物収納納屋を建てたが、その入口の両側が板に囲われて、この特徴[68]を備えていた［5-53］。ただし、彼らは家畜の舎飼いも、飼料の備蓄もせず、後にこの両側に畜舎を付け足したのはフランス系クレオールであった。ケージャンはこれを模倣して自らの納屋とし［5-54］、地域による農業の必要に応じて、先の基本形にいくつかの変形を生んだ。例えば、バイユー　テシュ上流域では自給的農民は綿とサツマイモを専ら栽培し、もともと余り大きな納屋を必要としなかった。ところが前世紀の末以来新しい入植者が増えて自由な家畜の放牧ができなくなり、干し草の備蓄を増やす必要から屋根の棟付近が突き上げられた高窓型に変わった。1930年代には屋根は駒型となり、備蓄スペースはさらに大きくなった。また、同バイユーの下流域では、自営農民はサトウキビを栽培して地方の製糖所へ売り、刈り取りや運搬のために多くのロバや馬を飼う必要があったので、その納屋は床面積が標準よりもはるかに大きかった［5-57～59］。

5．アカディアナ――結びに代えて

18世紀の半ばルイジアナに入った頃、アカディア人は困苦に耐え、勤勉な農民として評判が高かった。ところが、19世紀になって彼らの周囲にやってきたアメリカ人たちの間では、その評価ははなはだ芳しくなかった。ロングフェローが「エヴァンジェリン」に謳った牧歌的な田園に暮らす敬虔で勤勉、足るこ

とを知ったアカディア人の理想の姿とはうらはらに、その末裔たちは無学であり、向上心に欠け、怠惰に流れて貧困の中で遊びに耽っているというものである。詩人のアカディア人像は必ずしも史実とはいえぬ［8-3］ものの、質素で勤勉な農民たちはどこへいったのであろうか。

1850年の農業センサスはケージャンの典型的な小農は15エーカーの土地を耕作できる能力を持つが、たいていは4～12エーカーを耕すに過ぎず、例えば、テルボン郡では調査対象農家90のうち、15エーカー以上を耕作していたのは23に過ぎぬという。これは彼らが家族の必要と、家族の中の息子の数に応じて耕作していた［2-38］のであって、自給以上に多くを望まなかった結果である。彼らは勤勉ではあっても自給できれば良しとし、それ以上あくせく働く必要を認めない。しかし、これを理解できぬアメリカ人には、能力一杯まで働かぬ彼らは少なくとも向上心に欠け、さらに享楽的な生活が怠惰と映ったのである。

ケージャンを貧しいとばかり捉えるのは誤りであり、いずれも1823年に創設されたラファイエット郡の例であるが、サトウキビのプランテーション農場主のリストには27人のケージャンの名前があり、1860年の同郡の大奴隷所有者12人のうち10人、また、1850年の先のセンサスの奴隷所有者の68％が、それぞれケージャンであったと記録され、さらに同じ頃、抽出の標本調査からケージャンは6人の奴隷を所有するのが一般であって、それは南部の基準では小奴隷所有者[69]に当てはまるという［3-118］。しかし、ラファイエット郡はバイユー　テシュ流域の自営農民が最後まで残った地域であり、これが果たしてケージャン全体を代表するかは疑わしい。また、プランテーションが発展した南部全体でも、数人までの奴隷を所有する小農は多数存在したが、彼らはけっして豊かであったとはいえない[70]。プランテーションの農場主が不向きとして手を出さなかった痩せ地、略奪的な土地利用の結果見捨てた荒蕪地を耕し、僅かな家畜を飼う［43-26］彼らには、資本主義化が急速に進む中で、経済的地位を向上させる機会は

ほとんどなかったであろう。

19世紀の初め、アメリカ人によってルイジアナにプランテーションが初めてもたらされた時、ケージャンの中にも一部その経営者となった者があったことはすでに指摘した。しかし、彼らはケージャンの中に止まることを欲せず、自ら進んでフランス系クレオールの社会へ近づこうとした[3-118]。一般の大農場主に倣って、農園の管理は親戚の一人か縁者に任せ、自らは家族とともに都市へ移り住み、子弟をも都会風に育てたのである。それはケージャンの文化は田舎臭く、その社会は停滞的であるのに対して、クレオールのものは洗練され、進取的であると認めたからにほかないであろう。自分達のものはどこか劣っており、クレオールのものは優れている、極く一部とはいえ、ケージャンの中にこのような意識を持つ者があったことは見逃せない。これがケージャンをよく知らぬ他所者になると、経済的な貧困に加えて、その文化・社会をもはっきり劣ったものと思う者があって不思議でない。英語を解せぬことが彼らを一層不利な立場に立たせた。1916年の義務教育法による学校での英語の強制は、ケージャン文化に深刻な打撃を与えたことはすでに触れた。こうして二級アメリカ人という意識が彼ら自身にも、周囲にも染み込んでいった。

第二次大戦後になって潮流に変化が生じた。1950年代からの黒人公民権運動の高まりは、他の抑圧された者、少数者にもそれぞれの権利を主張する機会を与えた [38-162]。合衆国の建国以来、政府を初めとする権力機構が努力してきた、種々雑多な移民を最多数派のアメリカ文化へ同化する試みは、1970年代には失敗であったことが明白になった。坩堝には溶かしきれなかった民族文化が残り、それが誇りを持って蘇ってきた。20世紀末の今ではそのような民族性は流行にすらなっており、新しい民族景観の表現が地方色の豊かな観光を呼び起こすに至っている [11-245～246]。この民族文化復活の波に乗って、ルイジアナでは1968年州議会にCODOFIL[71]が設立され、フランスから多数の教師を招いて

公立学校におけるフランス語教育を始めさせた[2-xxi, 14-79～80]ほか、多方面に亘る活動の拠点となった。1974年以来毎年開催されているケージャン音楽祭[72]はその一つであり、また、同年サウスウェスタン　ルイジアナ大学にアカディアン、クレオール民俗研究センターが設立された。CODOFIL の意図する所はフランス語の復活を通じて、民族の文化に誇りを持たせることであり、それはかなりの成功を収めているといえよう。

1971年、ルイジアナ州議会は同州南部の22郡を公式に『アカディアナ』（図６）と認め、その地域の独自の文化を保存し、それを継承・発展させるように特別の配慮が必要なことを表明した[38-164]。このこと自体は望ましいことかもしれないが、実はこの名称には新たな問題が潜んでいる。ケージャンが住む土地＝ケージャンランドという呼び名が一般に使われていたのにそれが採用されず、何故アカディアナとなったのか。すでに触れたように、ケージャンという言葉には田舎者、怠け者、変わり者など侮蔑的なニュアンスがあったことは否定できない。しかし、CODOFIL の活動の成果で今や若者は胸を張ってケージャンを自認し、他者に対して自分は同等であり、少なくとも英語のほかにフランス語も使えるだけ劣ってはない、と言えるようになった[38-166]。それにも拘らずアカディアナとしたのは、一つには過去の汚点を払拭するために歴史を遡ってアカディア人を持ち出し、それをケージャンの同意語として美化しようとしたこと、もう一つは様々な民族が同じ地域に入り交じって住んでいることから、地域の細分を嫌って、同じフランス系のクレオール文化をアカディアンの名で一体化しようとした[73]ことが挙げられる[38-164]。そして、州政府・議会、産業界あげての後押しに連邦政府も加わり、フランス系の異色文化を持つ南ルイジアナはアカディアナとして国の内外に知られるようになってきている。

民族・文化の観点からは、同じフランス系であり、共通の要素はあっても、ケージャンとクレオールは異質であり、ルイジアナの歴史を通じて相容れぬも

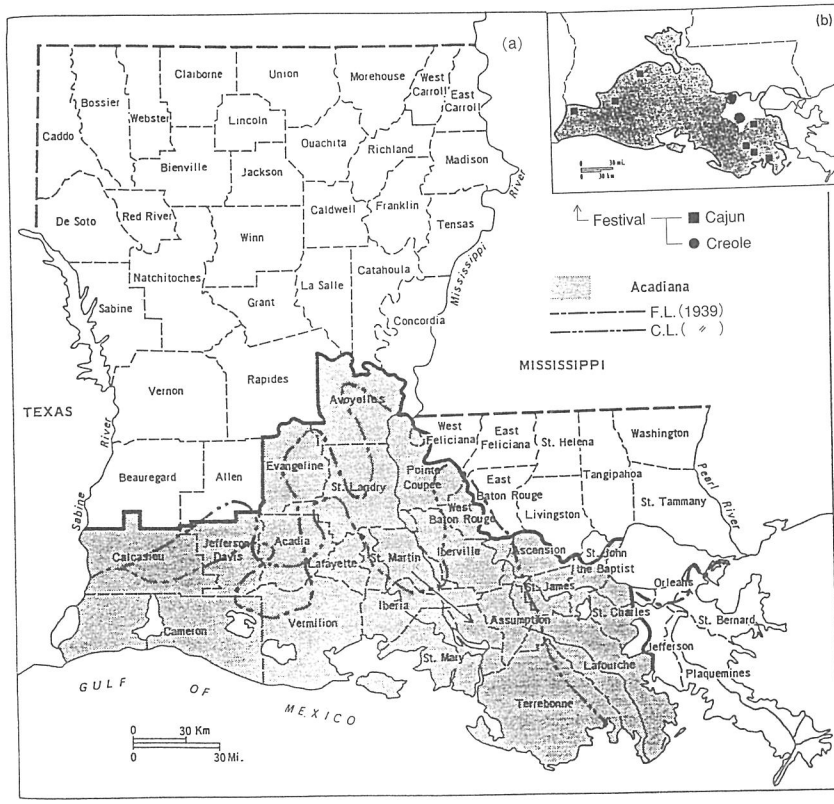


図６　アカディアナ［＊文献(38)，＊＊文献(25)による］
(a)　アカディアナ*と1939年**のフレンチ　ルイジアナ(F. L.)，ケージャン　ランド(C. L.)
(b)*　1982年のフレンチ　ルイジアナとケージャン　ランド

のとして存続してきた。それを俄かに一体化しようというのは相当無理があろう。現実は二つのケージャン、すなわち、アカディア人の末裔である<真の>、あるいは<純粋の>ケージャンと、フランス文化を持つルイジアナ生え抜きの白人＝フランス系クレオールである<新しい>ケージャンが存在することになる。ルイジアナにおける民族問題は人種とかかわって流動化しているが、今の

ところはこの白人フランス文化の統合は次第に成功しつつあるようにみえ、以前ならケージャンと呼ばれたら怒った人も、「このケージャン事業が始まる前には、クレオールと呼ばれていたんだ」とか、「自分でもケージャンと称しているが、本当はクレオールなんだ」と、言うほかないようになってきた [38-167] という。

もう一つの問題は、同じようにルイジアナのフランス文化の形成に貢献し、今もフランス語を使用している黒人、インディアン……特にホウマ族……である。アカディアナの名の下にフランス系文化の統合を進めながら、ケージャンは白人であるという主張に固執して、彼らをこの統合から排除した [38-187] のは明らかに矛盾している。黒人達はすぐに自分達も文化を同じくするクレオールだと主張しているが、インディアンは自分達の独自性を重視する態度を取り、ケージャンに入らぬと認めたものと思われている。このような人種的な裂け目を生じたにも拘らず、このケージャン化の過程は文化地域の地理的な統一に否定できぬ衝撃を与えた点で重要であるという。しかし、ここでは改めてケージャンとは何か、クレオールとは何かが問われているといえるのではないだろうか。地理的な統一が進むとはいえ、州政府公認のアカディアナも、それがどのような地域的実態を持つものであるのか、検証の対象にされなければならない。

第二次大戦前に初めてルイジアナのフランス系クレオールとケージャンの分布を採りあげた画期的な研究が行われた [25]。それは電話帳に収録された姓[74]を手掛かりに、フランス系の住むフレンチ　ルイジアナ（現在のアカディアナに相当）を地図の上に示したものである。その結果によると、フレンチ　ルイジアナはメキシコ湾のテルボン湾岸から北西へレッド川の谷口まで、延長1000 km を越える核心地[75]があり、それはアチャフラヤ川、バイユー　テシュの流域を覆い、一部はプレーリーの東縁に達している。これに次ぐ高い集中域がその東に並行し、さらに第三次の集中域が東はミシシッピー本流を越えてマーシュ

全域に、西はマーシュ全域とそれに隣接するプレーリー南縁、プレーリーの東部に広がる（図6—a）。そして、この外には顕著な集中域はみられず、この限界線を以てフレンチ　ルイジアナと認めることができるという［25-245～246］。さらに、フランス系の姓を追放前のアカディアで記録されたものとそれ以外に分け、前者のケージャン、後者のクレオールのいずれが卓越するかを調べて［25-248］、フレンチ　ルイジアナを二つに内部区分した。それによると、核心域の東側とその北半はほぼクレオール地域であり、西側ではプレーリーにおいてケージャン地域がフレンチ　ルイジアナの限界を越えて北へ広がっている。[76]

それまでは一般にケージャン地域は州の南西部と意識され、アチャファラヤ川がその東限と考えられてきた。また一方では、ケージャンはバイユーの民とみられたことから、アチャファラヤ川以東の州南東部の低湿地をケージャン地域と考えてきた。このような漠然とした捕え方の誤りは、このケージャン姓の卓越地を示す地図によって正されることになった。その後、ルイジアナ州のカソリック教会員の分布[77]がこのフレンチ　ルイジアナとほぼ重なることが確かめられ［27-53，54（第3図）］、また、ケージャン第3・4世代の民家の分布がこのケージャン地域とほぼ同一［22-188（fig. 13），189（fig. 14）］であって、特にその核心域には濃密な分布が知られている。かくして、バイユー　テシュの流域からアチャファラヤ川のスオンプにかけてがケージャン地域の核心として広く認められるようになった。

しかし、姓の分布から明らかにされたフレンチ　ルイジアナ、ケージャン地域は第2次大戦前のものである。ケージャン及びその文化が受けた戦後の変化は非常に大きいから、それが地域にも変化を与えなかったはずはない。1981～82年に、先のフレンチ　ルイジアナに48×48 kmのメッシュを掛け、35のメッシュから各1集落を選んで、住人各5人（必ず郵便局長、聖職者1人を含む）に面接するなどして行われた意識調査の結果は、ケージャン地域の著しい拡大と

クレオール地域の著しい縮小を示す[38-169, fig. 5]。方法が異なり、問題意識もやや異なるので、直接の比較は無理であるが、アカディアナによるフレンチ　ルイジアナの統合を示すものといえよう。白人クレオール地域はその牙城ニューオリンズの周辺だけになっている（図6—b）。しかし、拡大著しいケージャン地域の中にも、<真>と<新>の矛盾を孕む問題が隠されているはずである。

さらに問題がありそうなのは、この新しい地図に示された民族のお祭り行事である。クレオールのものはともかくも、ケージャンのそれは核心地域には一つもなく、周辺、もっといえば<新>地域に集まっているとみえることである。アメリカ化によってケージャン文化が空洞化していくなかで、商業主義による<新>ケージャン文化が創造されているのでなければ幸いである。それかあらぬか、異色の民族文化を売り物にする観光がブームであると聞く。

注

1）1980年のセンサスによれば、白人•黒人クレオール、インディアンも合わせてルイジアナ州に約100万のフランス系住民がいる［38-161］。その内訳は不明であるが、ケージャンが最大多数である。なお、州人口は420万、その半分近くが南部に住み、住人の二人に一人がフランス系である。州人口は最近著増（70～80年に＋60万）しており、かつては南部ではフランス系が最大多数であった。

2）フランス人は1724年にアフリカから直接奴隷の輸入を始めている［2-34］。

3）クレオール（Creole）はもともと「その土地固有の」「その地方生れの」「輸入されたものでない」という意味であるが、ルイジアナでは最初に入植したヨーロッパ人、特にフランス人の子孫とその文化を指し、新しく到着した移民と区別した。ニューオリンズのフランス系文化はそれを代表し、後から入植して農村色の強いケージャン文化とは異質である。もっとも、ルイジアナ生れの奴隷をクレオールと呼んで、アフリカから新来の奴隷と区別し、ルイジアナ産のトマト、馬などにもクレオールを冠して他産地のものと区別した。クレオールものは亜熱帯の湿潤な環境に馴れて、品質が優れているという。このような多義的な使用から混乱・誤用も生じ、ついにはクレオールは白人と黒人の混血をいうようにもなった［2-xiii～xv、34～36］。

4）　そこでは“Cajun”をカジュンと表記したが、現地の発音からケージャンが正しい。

5）　次のドイツ人の入植も含めて、初期の植民はロウ（Low, John.）のミシシッピー会社による。それは25年の事業独占期間に白人6000人と奴隷3000人を送り込む計画であったが、早急に利益を生まぬ植民地投機から出資が引き上げられて、会社は1722年に潰れ、結局24年までに白人1700人、奴隷3300人を入れたと推測されている［28-5］。

6）　1728年に無賃で大西洋を渡った2500人の３年々季の契約奉公人は規模からみて最も重要。なお、1765年のフランス人の推定人口は5500余人［28-6～7］。

7）　ここへは1754年にロレーヌから、1774年に合衆国メリーランドから、それぞれドイツ人が加わった。

8）　1778年に王室の援助でカナリー諸島からかなりの家族が移植され、翌年にもバトンルージュ近くのカルヴェスタウン（Calvestown）、バイユー　ラフォルシュに臨むヴァレンズエラ（Valenzuela）、バイユー　テシュ沿いのニューイベリア（New Iberia）へ入植があった。この２年間の入植者数は1053人である［28-13～15］。

9）　当時はセントローレンス川下流域のヌーヴォーフランスを指す。

10）　追放されたアカディア人の総数は１～1.5万人と推定される［37-146］。1762年までにフランス本国へ帰った約2000人、一時的にイングランドへ送られて再送出を待つ約4400人を別にして、1763年、ニューイングランドには6000人以上のアカディア人がいた。もっとも、彼等は常に逃亡を企て、人数は浮動した［12-26］。

11）　スペイン領ルイジアナに７年滞在、植民地政府の信頼厚いフランス人薬剤師ラクードリアンヌ（la Couderienne. P. d.）が母国で行き場のないアカディア人を開拓に活用するよう提案、スペイン王チャールス３世が受け入れて実行された［14-71～72］。

12）　流入ドイツ人はガイアナを離れた者であり、フランス領アンティル諸島全体で約4000人に上った。植民地当局はその流入を食い止めようとしたが空しかった［12-67］。

13）　それでも現地監督官はアカディア人の良き理解者であり、禁欲的で、忍耐強く、勤勉と評価し、同情的であったが、首都カポフランセ（今のカプハイチアン）にいた総督たちには彼等は御しがたい不平・不満分子の塊と映った［12-33～37，61～67］。

14）　ペースは歩幅をいう。１ペースを通例にしたがって３フィートとすれば、800ペースは約720 m である。

15）　フランスの旧面積単位。ルイジアナとカナダのケベック州では今も使用され、１ア

ルバンは約１エーカー。４アルバンは約１km² である。

16） この強権による抑圧にアカディア人は表面的には従ったが、これがやがてクレオールの反乱に荷担して彼等の要求を認めさせ、総督の更迭を引き起こすことになった。

17） 少なくともモールでは反乱の恐れから彼等は武器を与えられず、狩猟・漁撈は禁止されていた。

18） モールに到着した家族の構成員は５～８人であった［12-36］が、少なくともその一部は追放によって引き裂かれたものであったと思われる。

19） 現河道の自然堤防の高さはニューオリンズの上流で５m を越えるが、下流になるにつれて低くなり、ブラクミン郡ポイントアラハシュで3.5 m 強、河口に至る諸水道の分岐点で1.5 m 程度である［19-17］。もちろん、河口では０m。

20） 約150年前に本流とアチャファラヤ川の間に一水路が開かれ、支流アチャファラヤ川の流量が次第に増えて本流に代わろうとした。そこで1950年代に陸軍工兵軍団がこの水路を締め切り、その上流に別の水路を開いて、そこに設けたダムと水門によりアチャファラヤ川の流量を平水時は本流の３分の１、高水時は２分の１に調節している［14-19］。

21） この東にはすぐに段丘化した隆起三角州が迫り、バイユー　マンチャックはその西端に峡谷を刻んで東へ流れている。もと溢れ出た水はミシシッピーの自然堤防と下流でこれに接する段丘の間に滞留したが、滞留湖の水位上昇の結果、東から隆起三角州を谷頭浸食して伸びてきたアミテ川支流が作った鞍部を突破し、現流路になったと考えられる。

22） この地割の歴史的背景については［15］参照。

23） 森林伐採の苦労がなく、初期には河川漁業が重要であったこともあげられる［31-175］。

24） 石材はここでは入手困難。アカディアでは水車に製粉を頼ったが、それは領主代理人の経営であった。ここには水車を営む領主はなく、小農は臼と杵で十分であったろう。

25） 生きている化石、鱗骨魚の１種。メキシコ湾・フロリダ沿海の特産で、体長３m に達する。

26） カナダ中・南部から渡り、19世紀初めには約50億羽を数えたが、食料、家畜の餌、羽のために殺戮され、半世紀の間に絶滅した。

27） スキッフは船底のセンターボードで凌波性を増し、一本マストに小さな帆を持つ

が、主にオールで推進。シュリンプ船は二本マストに縦帆を揚げ、もっぱら帆走する。

28）　スオンプの樹木に着生、垂下するサルオガセモドキ。その強靱な繊維を編んでロープや撚糸を作り、また、粘土や石灰に混ぜて住居の壁材に使った［2-30，118］。

29）　野牛の群が粘土層の上の溜まり水を飲むために表土を踏み凹めた跡という［33-576］。

30）　18世紀の英•仏植民地戦争に、ただ生活の安定を願って固く中立を守ったにも拘らず、祖先のアカディア人は過酷な追放の憂き目をみた［37-140～141］。この追放と放浪の苦難の思い出は長く語り継がれた。それが事あるごとに外に対して身構え、内に団結を強める一因になっているのは疑うべくもないであろう。

31）　1812年の州成立当時、全白人々口4.5万人のうち、アメリカ人は4分の1未満であったが、1824年にはフランス系とアメリカ人の比率はほぼ同じとなった［28-101，120］。

32）　ルイジアナ購入後まもなく、新植民地政府は先にフランス•スペイン政府が旧住民に与えた土地所有権が法的に不完全で認められぬとし、議会がこれを支持する土地法を1805年に成立させて、土地所有をめぐる混乱が起こった。旧住民側は既得権は保証されるというルイジアナ購入時の約束に違反し、仮に法律上の瑕疵があっても、それは新旧宗主国間の問題であり、自分達は無関係であると主張して争った。旧住民側は連邦議会に請願を繰り返し、植民地土地法は効力を停止され、司法機関が旧土地所有権を精査することになったが、1834年になっても係争の1.8万余件の過半は未処理で、問題の解決は遅々として進まなかった［28-144～150］。この抵抗の中心は白人クレオールであったのは間違いない。文字を知らず、英語も話せぬケージャンは何ほどの力になりえたろう。なお、この土地法の効力停止とともに連邦政府は公有地＝無主の土地を問題解決まで競売しないと決定したので、1エーカー当たり25セントであった地価は2ドルに急騰した［28-145］。

33）　1830年までにチャールストンに代わって南部第一の港湾都市［11-117］となり、魚介類の需要も増大していた。

34）　本流域はすでにケージャンの居住域ではなかった。なお、この戦争は彼らには無関係と映り、南部連合軍に狩り出されたものの、脱走して帰る者が多かった［2-xvi］。もっとも、ケージャンの居住域でも被害がなかったのではない。例えばヴァーミリオン湾北岸のマーシュに突出する岩塩ドームの丘アヴェリー島は、塩が肉貯蔵用の戦略物資であったので北軍に占領され、製塩施設、アメリカ人所有者の邸宅・庭園などは

破壊された。

35） 奴隷から解放されても労働力しか持たぬ黒人は「シェアークロッパー」として働くほかなかった。それは小作人の一種とはいえ、常に土地所有者の管理下に置かれ、収益も収穫の半分を上回ることなく、雇主に半永久的な負債を負って、実際は奴隷に近かった。

36） 占領軍に支援され、南部の州政府に居場所を見つけた北部の政治家。カーペット地のカバン一つを持って来て、一儲けを企む者（carpet baggers）と南部で呼ばれた［40-94］。

37） 今ではテキサス州南東部、アーカンソー州のグランド　プレーリー、カリフォルニア州のサクラメント　ヴァレーが大米産地として知られるが、企業的な大規模米作はルイジアナ州のプレーリーに始まった［33-574］。

38） 連作すると望ましくない赤米が混ざり、必要な時は2年続けて牧場とする。

39） メキシコ湾岸では1894年テキサス州コルシカナで石油が発見されていたが、大きな関心を呼ぶ契機となったのは1901年の同州ボーモントでの発見であった［14-166］。ジェニングスの発見はこれに次ぐもの。

40） 毛皮を目的にしたマスクラット、ヌートリアの採捕が中心。前者はルイジアナの原生種であるが、後者は養殖用にアルゼンチンから移入されたものが野生化して繁殖した。ともに大型の齧歯類で、水生植物の根を主食に何年かのサイクルで大繁殖を繰り返している。なお、ルイジアナは合衆国一の毛皮産出州である。

41） どの集団も時と場合によって参加する家は少しずつ変わり、決して固定的ではない。

42） 彼等は家屋を建ったまま台車に乗せ、数頭の馬に曳かせて移動させるのが得意であり、移動先で新しい土台の上にそのまま据え付けたという。時には柵を倒し、小川に橋を架け、かなり長距離を移動させたこともある［2-124］。

43） ワニ、シカなど種類によっては絶滅の恐れから全面禁猟、あるいは厳重な制限がある。

44） 一般に生肉は2～3日しか保たず、一週間に一度程度の頻度で行われた［2-46］。

45） 屋内とは異なり、野外の料理は男達の役目であった。屠殺・解体はもちろんである。

46） 今週末はどの家が会場かは口から口へ伝えられ、週末までには知らぬ者はなかった。

47）　他所者が舞踏会に参加するには知人を介して招待状を入手しなければない。それはホテルの舞踏会でも同じ。招待された者は歓迎され、特に若者は花婿候補者として注目された。しかし、招待もされぬ他所者が闖入しては悶着を起こす。美しい娘に目を付けた伊達男がわざと闖入して、決闘におよぶこともあった。今日のホテルの舞踏会でも招待状のない闖入者が後を絶たず、ホテル側は乱闘を恐れて警備団を雇い、自衛している。

48）　昔は結婚はたいてい20歳までのことであった。

49）　ルイジアナでは従兄弟間の結婚は原則として法的に禁止されていたが、実際には便法を講じて多くの結婚があった。

50）　しばしば盥を踏み鳴らして踊る。自分達の存在に改めて注意を喚起するのであろう。

51）　ウィットにとんだ受け答えとともに、悪意のないジョークと法螺は彼等の天性という。

52）　カーニヴァルとも呼ばれ、カソリックの世界で広く行われるこの祭りは、一般に四旬節前の３日間であるが、ここでは聖灰水曜日、すなわち四旬節の前日のみである。

53）　身分階級を逆転して、下層の者がエリートを嘲笑したヨーロッパ中世の祭りの習俗に繋がるという。

54）　顔を隠す、異装を纏う、酔うなどは祭りという常と異なる日に、参加者が姿・心ともに日常を離れるため。顔を隠すのは誰か判らなくして、付随しがちなトラブルを避ける工夫でもあった。

55）　南北戦争前にオペルーザスにフランクリン　カレッジ、グランコトウにセント　チャールス　カレッジ、セイカード　ハート　アカデミィがあったが、ルイジアナの教育の中心であったチャールス　カレッジの1838年のケージャン学生は15人、全登録学生の２割に満たなかった。また、1845年に公立学校が州全域に設立されたが、例えば1850年のラファイエット郡の就学年齢児に占める就学者の割合は３割に満たなかった。ケージャンは学校教育の必要を認めず、日常生活に必要な知識は家庭の内外で両親が授けた。

56）　義務教育となっても初期にはケージャンの就学率は低かった。それが改善されるのは1930年前後からで、近代的な道路網がルイジアナを他の地域と結び付け、自動車・ラジオなど技術革新の成果が導入される前触れとなった時であった。ケージャンは自らの価値観や生活を変えざるを得ず、子弟たちの将来に学校教育の必要を認めたので

ある。

57） 1793年ホイットニー（Whitney, E.）が画期的な綿繰機を発明し、それがワタのプランテーションが大発展する契機となった。

58） 柔らかい一枚の生皮を用いて、足を包むインディアンの履き物。アカディアの故地において、アカディア人たちがすでに愛用していた［37-145］。

59） 肉を長時間煮込み、またその煮汁を使って様々なソースを作る料理法は中世にフランスの農村で発展し、アカディアを経て、ルイジアナに引き継がれた［2-138、30-152］。なお、ボタージュと名の付いた料理はアカディアにも、ルイジアナにもない。この語が現在のボタージュ料理を指して使われたのはフランスにおいて18世紀以来のことであり、すでに本国と北米の旧植民地との関係は断たれていたからであろうという［29-222］。

60） もともとこの料理には牛・豚の肉は用いない。

61） 1718～34年の間にルイジアナに入植した建築家で、記録は1774年のもの。

62） 中央の主室部は2部屋が横に並び、奥行より横幅がやや大きかった。

63） 第3世代までの住居の階段の位置ははっきりとは分かっていない。

64） 第3・4世代の民家はラファイエットのアカディア村やヴァーミリオンヴィルの野外博物館、バトン　ルージュのルイジアナ州立大学農村生活博物館に復元・保存されている。

65） 妻側が一部屋幅の細長い型の民家。妻入りで、前後に歩廊を持つ。歩廊を持つ民家の濃密分布域にみられる民家の一形式［22-186］であるが、第3・4世代のいずれに属するかは不明。

66） 建て替えられることがないので住居よりもよく残るという。ただし、使われているイトスギの板が今では入手できぬ立派なもので、塗料が塗られてないのでかえって年代物として高価に取引され、このままではやがてすべて解体されようという。

67） 穀物を運んできた荷車の上から投入するのに適した高さに設けられていた。

68） ジャーマンコーストに入ったドイツ人は各地出身者がいたが、スイスに近い山村に同じ型の穀物納屋があり、それが持ち込まれたのではないかという。

69） 南部の農村社会は一般にはプランター（プランテーション経営者）と黒人奴隷、その中間に白人の自営農民の3階層に分けられ、さらに自営農民層は上層のヨーマン（200エーカーまでの土地を家族と数人までの奴隷で耕作）とワンホースファマー（50エーカー足らずの土地を家族で耕作）に区分される［43-30～31、24、28］。ここでい

う小奴隷所有者はヨーマンに相当しよう。

70）　南部のヨーマンはほとんどいつも貧困であるという指摘がある［43-24］。

71）　正式名称は「The Council for the Development of French in Louisiana」。初代委員長はケージャンのドゥマンジョ（Demengeaux, J.）州議会議員［38-162］。

72）　民族音楽に対する関心はもっと早く、1928年にコロンビアほかのレコード会社がケージャン音楽の録音を始めた。1930年代以降も民族音楽調査者のルイジアナ訪問は続き、プレーリー地域のケージャンのバラード、古いケージャンのダンス音楽などが録音された。民族音楽学の大家ロマクス（Lomaxs, A.）は1930年代に父とともに、前世紀またはそれ以前に遡る独唱や器楽独奏を録音していたが、1960年代にケージャン音楽の演奏者を求めてリンツラー（Rinzler, R.）をルイジアナへ派遣し、彼は評判のトリオを見出した。このトリオの一人ベルファ（Belfa, D.）とリンツラーが草の根レヴェルでケージャン音楽を掘り起こし、1968年の最初の音楽祭に漕ぎ着けた［2-xx～xxi］。

73）　アカディアンの語にクレオールを含むという拡大解釈はカリスマ的な知事Edward, E. に始まり、すぐあらゆる宣伝媒体にとり挙げられて広まった。

74）　フランス系を示す姓が極めて目立つものであることはよく知られており、また、そのなかでもアカディア系は限られた集団のなかで結婚が重ねられたため、集団の人口規模に比べて姓の数が少なく、ほぼその全部が把握されている［2-73］。

75）　各地域の電話帳の約10％について、数の多い姓を10選びだしてその総数を数え、そのうちの何％がフランス系であるかを調べた。核心地（筆者の仮称）はフランス系が100％。以下、これに次ぐ集中地域（同）同75％以上、第三次の集中域（同）同50％以上と続く。なお、典型的な１学区について、同じ方法で生徒の姓を調べ、それがその地域の電話帳の結果と同じであったことを確かめて、このサンプリング法の妥当性を検証し、さらに各限界線の決定に当たっては、現地における面接調査も行っている［25-243～244］。

76）　ここは既述のように19世紀の末に入ったアメリカ農民が数の上では最多であるが、フランス系はほとんどすべてケージャンである。

77）　電話帳を手掛かりに、姓の分布によってフレンチ　ルイジアナ、ケージャン地域を地図上に示したKniffen, R. B. も、それがカソリック信者、フランス語、特異な食習慣などの分布調査により補強されるべきことを述べている［25-250］。

＜文献＞

(1) Allain, M. Twentieth-Century Acadians. in Conrad, G. R.(7)

(2) Ancelet, B. J., Edwards, J. D. and Pitre, G. Cajun Country. Univ. Pr. of Mississippi, 1991

(3) Baker, V. B. The Acadians in Antebellum Louisiana : A study of acculturation. in Conrad, G. R.(7)

(4) Brasseaux, C. A. Acadian Education : From cultural isolation to main stream America. in Conrad, G. R.(7)

(5) Comeaux, M. L. The Cajun Barn. [Geogr. Rev. vol. 79, no. 1, 1989]

(6) Comeaux, M. L. Louisiana's Acadians : The environmental impact. in Conrad, G. R.(7)

(7) Conrad, G. R. ed. The Cajuns : Essays on their history and culture. Univ. of South Louisiana, 1978

(8) Conrad. G. R. The Acadians : Myths and Reality. in Conrad, G. R.(7)

(9) Conrad, M., Finkel, A. and Jaenen, C. History of the Canadian People, vol. 1 : Beginnings to 1867. Copp Clark Pitman, 1993

(10) Conzen, M. P. ed. The Making of the American Landscape. Routledge, 1994 (first publ. by Harper, 1990)

(11) Conzen, M. P. Ethnicity on the Land. in Conzen, M. P.(10)

(12) Debien, G. The Acadians in Santo Domingo : 1764-1789. in Conrad, G. R.(7)

(13) 藤岡　醇『サンベルト―合衆国南部：分極の構造』青木書店、1993

(14) Hallowell, C. People of the Bayou : Cajun life in lost America. E. P. Dutton, 1979

(15) Harris, R. C. The Seigeurial System in Early Canada. Madison, 1966

(16) Harris, C. French Landscapes in North America. in Conzen, M. P.(10)

(17) Heck, R. W. Building Tradition in the Acadian Parishes. in Conrad, G. R.(7)

(18) Hilliard, S. B. Plantation and the Molding of Southern Landscape. in Conzen, M. P.(10)

(19) 井関弘太郎『三角州』朝倉書店、1972

(20) Keating, B. Cajunland : Louisiana's french-speaking coast. [Nat. Geogr. vol. 129, Mar. 1966]

(21) Kniffen, F. B. Bayou Manchac : A physiographic interpretation. [Geogr. Rev. vol. 25, 1935]

(22) Kniffen, F. B. Louisiana House Types. [A. A. A. G. vol. 26, no. 4, 1936]

(23) Lawrence, E. E. Jr. The Louisiana French in 1900. [Journ. of Hist. Geogr. vol. 14, no. 4, 1988]

(24) Mead, W. R. and Brown, E. H. The United States and Canada : A regional geography. Hutchinson Educ. Lib. 1962

(25) Meigs, P. 3rd. An Ethno-Telephonic Survey of French Louisiana. [A. A. A. G. vol. 31, 1941]

(26) 水山高幸、ミシシッピ川のデルタ［地理、vol. 13, no. 12, 1968］

(27) 中川　正、ルイジアナ州における墓地の分布特性――文化集団単位としての墓地［筑波大学人文地理学研究XVII、1993］

(28) Newton, L. W. The Americanization of French Louisiana. Arno Pr. 1980 (first publ. by Univ. of Chicago, 1922)

(29) 大島英子、アカディアの伝統料理――北米大陸のフランス料理［園田学園女子大学論文集25, 1991］

(30) 大島英子、ケイジャン料理――南ルイジアナのアカディア人の料理［園田学園女子大学論文集27, 1993］

(31) Paterson, J. H. North America : A geography of Canada and the United States. 5th ed. Oxford Univ. Pr. 1975

(32) Phillips, H. The Spoken French of Louisiana, in Conrad, G. R.(7)

(33) Post, L. C. The Rice Country of Southwestern Louisiana. [Geogr. Rev. vol. 30, 1940]

(34) 理科年表 1994年版

(35) Russell, R. J. and Howe, H. V. Chenier of Southwestern Louisiana. [Geogr. Rev. vol. 25, 1935]

(36) Russell, R. J. Flotant. [Geogr. Rev. vol. 32, 1942]

(37) 島田正彦、アカディア人の追放、水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』柳原書店、1986

(38) Trépanier, C. The Cajuanization of French Louisiana : Forging a regional identity. [Geogr. Journ. vol. 157, no. 2, 1991]

(39) 土屋　巌、合衆国の融雪洪水［地理、vol. 30, no. 6, 1985］
(40) Vardaman, J. M.(森本豊富訳)『アメリカ南部――大国の内なる異郷』講談社、1985
(41) Voohies, J. K. The Acadians : The search for the promised land. in Conrad, G. R.(7)
(42) Watson, J. W. North America : It's countries and regions. Longmans, 5th rev. ed. 1970
(43) 山本幹雄、アメリカ旧南部における非奴隷所有農民（上）――第二次アメリカ革命の構造把握のために［史林 vol. 38, no. 1, 1955］
(44) 山本幹雄、アメリカ旧南部における非奴隷所有農民（下）――第二次アメリカ革命の構造把握のために［史林 vol. 38, no. 2, 1955］
(45) Zelinsky, W. North America's Vernacular Regions. [A. A. A. G. vol. 70, no. 1, 1980]